

II. 遺跡調査の概要

きたたんば ひがしながれ

北丹波・東流遺跡(本発掘調査B)

所在地 稲沢市下津丹下町・下津森町・下津下町西一丁目
(北緯35度15分6秒 東経136度49分39秒)

調査理由 街路改良工事(都)名古屋岐阜線

調査期間 平成29年5月～平成29年6月

調査面積 490㎡

担当者 酒井俊彦・蔭山誠一



調査地点(1/2.5万「一宮」)

調査の経過 街路改良工事(都)名古屋岐阜線にともなう事前調査として、愛知県建設部都市整備課一宮建設事務所から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、県道名古屋岐阜線の下津交差点から北側の道路中央部分490㎡を調査した。県道名古屋岐阜線の本事業にともなう拡幅部分は、平成24年度に2,320㎡、平成25年度に1,000㎡、平成27年度に390㎡を分けて調査している。本年度の調査では、調査区の北側を17A区、南側を17B区に分けて調査した。

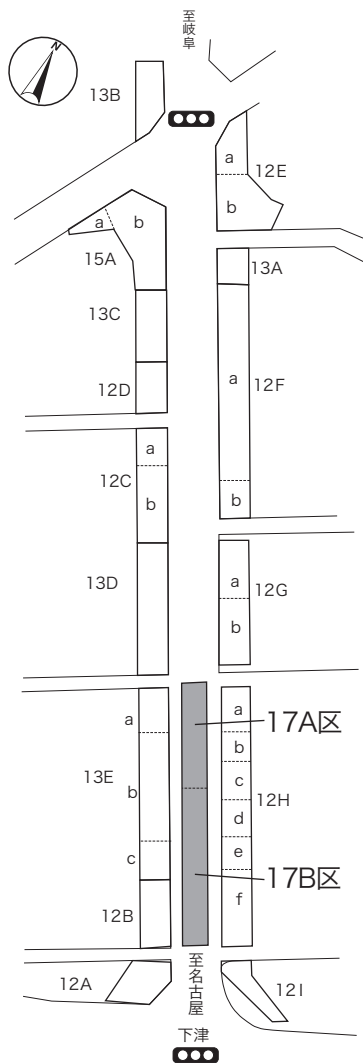
立地と環境 遺跡はJR東海東海道線稲沢駅から約350mの地点にあり、現在でも県道名古屋岐阜線が遺跡の中央を通過している交通の要地にある。その立地は青木川の右岸にある水田と宅地・畑地が混在する微高地の縁辺部分にあたる。

調査の概要 調査区の現況は、県道の道路敷きの下となり、県道道路面の標高が5.5m前後、その下に近代以後の水田耕作土層が2層あり、上層の道路敷設以前の水田面標高が5.0m前後、その下に整地層を挟んで、下層の水田面標高が4.3m前後にあり、下層の水田耕作土層までは、バックホウにより除去した。遺構検出は2面実施し、1面は標高4.2m前後、2面は標高4.1m前後であった。

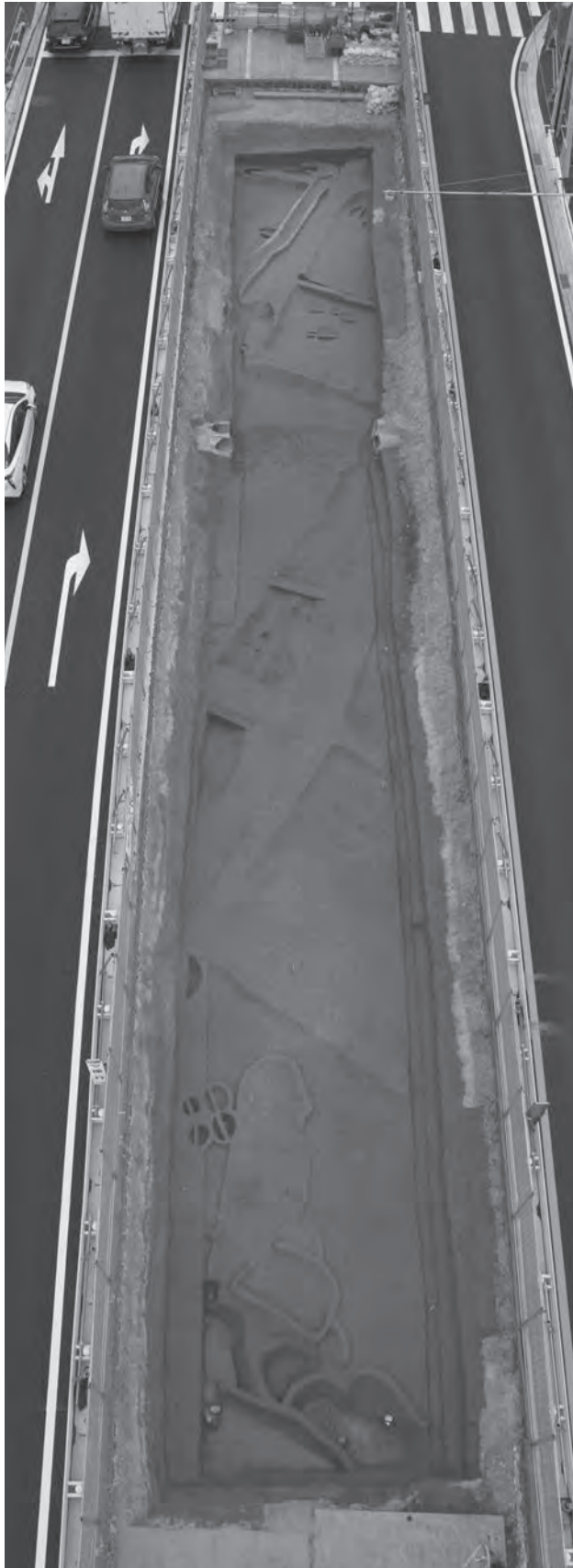
確認できた遺構は飛鳥時代から奈良時代にかけての竪穴建物22棟、土坑85基、溝2条、自然流路1条、鎌倉時代から室町時代の溝16条、戦国時代～江戸時代にかけての水田遺構15筆、溝1条、土坑15基がある。

1面の遺構は、17A区では調査区の北端部において江戸時代後期以後の水田遺構があり、調査区の南側に戦国時代以後の条里型水田遺構を6筆確認した。17B区では調査区全体に戦国時代以後の条里型水田遺構9筆、溝1条があり、調査区北端部に17A区に続く中世後期の溝6条、中央部分に南北方向の溝1条を確認できた。

2面の遺構は、17A区では調査区の南側において17B区の北端で1面において確認した溝から続く南北方位の中世以後の溝7条、その北に同時期の溝8条、17A



調査区位置図(1:2,000)



17B区1面全景(北西より)



17A区2面全景(北西より)

区北端部で古代の自然流路と思われる落ち込み1条とその南側に竪穴建物4棟、土坑20基、17A区と17B区の境部分に東西方向の古代の溝1条、この溝の北に1棟と南に17棟の竪穴建物を確認した。

古代の遺構からは、6世紀末から8世紀後半にかけての須恵器と土師器などが出土し、東西方向の溝の時期を挟んで竪穴建物や土坑などが連綿と営まれたものと考えられた。17B区の北端部にある自然流路は、当初上面に炭化物が多くみられ、その範囲を竪穴建物と認識して掘削を行ったが、北の調査区外側に傾斜する自然流路であることが確認できた。その埋没過程において複数の柱穴となる土坑がみられる。17B区の中央東壁にかかる位置に、動物骨が出土する土坑が1基ある。

中世の溝は方形区画を形成していた区画溝と思われ、出土遺物には鎌倉時代の山茶碗や小皿が出土するが、室町時代以後の灰釉縁釉小皿などが少数出土することから、時期は室町時代にかかるものと思われる。

1面にて検出された南北方位の条里型水田遺構からは、古代の須恵器・土師器、中世の山茶碗・小皿・伊勢型鍋、戦国時代の大窯様式の施釉陶器などが出土しており、戦国時代から江戸時代にかけてのものと考えられる。水田遺構は17A区から17B区北側では深さ5cm以内と浅く、17B区南側では深さ20cm～30cm前後と深くなる。

ま と め 今回の調査成果から、飛鳥時代から奈良時代にかけて、鎌倉時代から室町時代にかけて、戦国時代から江戸時代にかけての大きく3時期の遺構が確認できた。今後は平成24年度から平成27年度に実施した調査成果と合わせ、全体の遺構変遷や時期毎の遺跡の性格などの究明が望まれる。(蔭山誠一)



17A区2面全景(北西より)



17A区023SI・026SX・024SD(南より)



17A区031SI遺物出土状況(東より)



17A区037SK遺物出土状況(南東より)



17B区062SK 獣骨出土状況 (西より)



17B区135SL (068SIカマド) 検出状況 (南西より)



17B区066SI・067SK・068SI (北東より)



17B区126SK 磁板出土状況 (北より)



17B区130SI (南西より)



17B区137SL (037SIカマド) 土層断面 (北東より)



17B区034SD～037SD (西より)



17B区129SD 遺物出土状況 (西より)

ほくごんかまあと

北山窯跡(本発掘調査B)

所在地 瀬戸市落合町地内
(北緯35度15分8秒 東経137度7分36秒)

調査理由 緊急急傾斜地崩壊対策事業

調査期間 平成29年5月

調査面積 100㎡

担当者 酒井俊彦・武部真木



調査地点(1/2.5万「多治見・猿投山」)

調査の経過 調査は緊急急傾斜地崩壊対策事業に伴い、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。これまでに北山窯跡の主要部分と勘助窯跡については(公財)瀬戸市文化振興財団によって平成27年度に発掘調査および工事中の立会調査が行われている(市調査)。今回は北山窯跡北縁の隣接地100㎡について発掘調査を行った。

立地と環境 遺跡の立地する丘陵地は水野川と支流の鳥原川との合流点付近、水野川右岸の北部山地にあたり、南東側にかけて広がる品野盆地を望むこの山稜付近には戦国期の城館跡(落合城跡)の存在が推定されている。調査地点の標高は171mであり、一般国道248号北西側に近接して周辺は住宅地となっている。すぐ背後の標高174~176mの南向き斜面に勘助窯跡があり、市調査により窯体2基(1号窯、2号窯)の位置と灰原が確認されている。出土遺物は火窯第1段階後半から第3段階に属するものがあり、操業期間は16世紀初頭から中葉あたりに位置づけられる。また、勘助窯跡の灰原等を造成して北山窯が築かれたことも明らかとなった。

調査の概要 北山窯跡は調査以前に、位置と近代から戦前まで操業した連房式登窯であることが知られていた。市調査により窯体では焼成室の一部とコクド・煙道・煙突が検出されたほか、窯体周囲の西側・北側・東側にはそれぞれ作業場と考えられる平坦面が、西側と東側には加えて石垣がみられた。さらに東側では通路(階段)と区画溝が確認されている。

今回の調査地点では、窯体の東側の平坦面とこれにつながる通路(階段)、石垣などの延長部分を確認した。調査区北端部は最大で厚さ1.2mに達する大量の板トチからなる物原層で覆われ、その一部が東側の平坦面にまで及んでいた。可能な範囲内でこれを除去したところ、平坦面の境界を不整形な凹みとして認識できた。平坦面の規模は検出範囲で4×3m、3個の礎石列とピット1基がみつき、小規模ながらも建物の存在が想定される。出土遺物は陶器の植木鉢、磁器の染付飯茶碗・湯呑・皿のほか、白色製品の焼成不良品が含まれる。匣鉢やエブタ、高台の歪みを防ぐ磁器製円柱形の窯道具などがある。なお、平坦面を造成した整地層にはここでも大窯期の播鉢、天目茶碗陶片、窯道具が含まれており、破碎された小片が確認できた。

まとめ 聞き取り調査により北山窯跡の操業開始は明治35年に遡り、最終段階には戦前まで稼働していたことがわかっている。発掘調査の期間中には、当時の風景を記憶し、あるいは実際の作業に関わった体験をもつ複数の見学者から話を伺うことができた。埋蔵文化財として取り扱う場合にも近代の変化はめまぐるしく、時代を映す重要な情報が含まれていると考えられるが、既に詳細が復元できない事柄も少なくない。

(武部真木)



調査地点の堆積層断面（南から 上部が物原層）



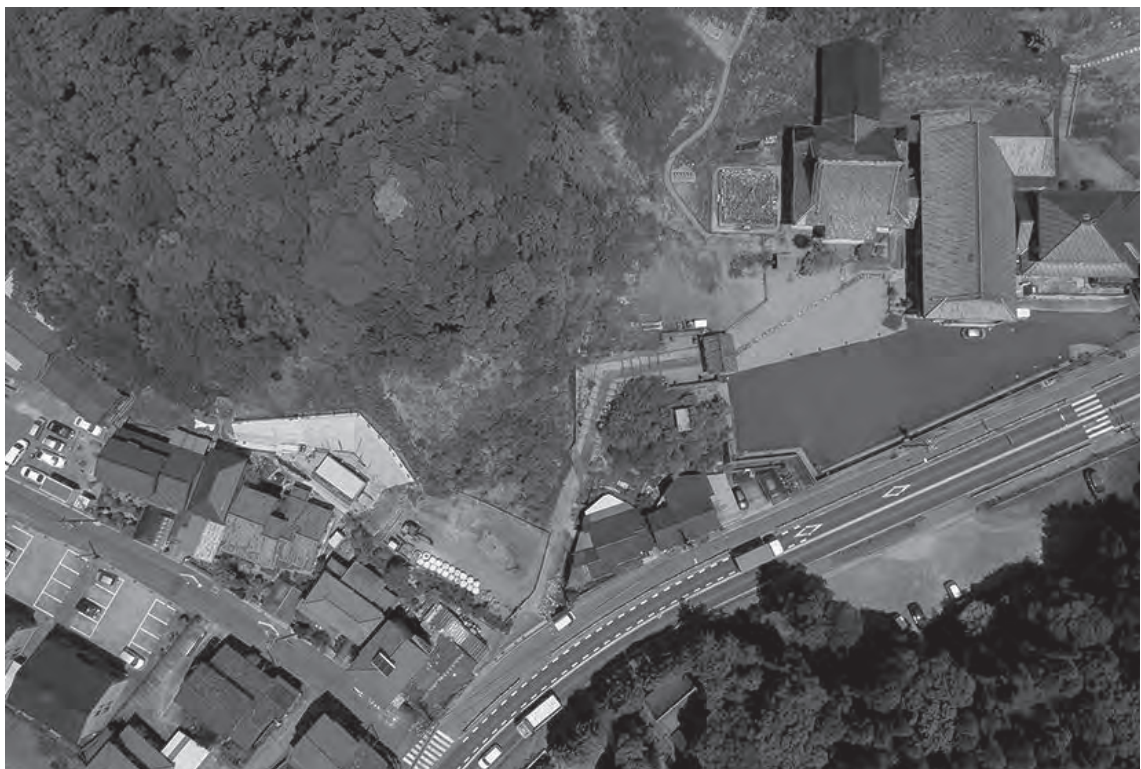
平坦面と礎石列（南西から）



調査地点全景（東から）



階段・石垣部分（東から）



遺跡全景（画像上が北）
中央下寄りが北山窯調査地点、勸助窯跡は丘陵部斜面、調査区右手は久雲寺境内

きよすじょうかまち

清洲城下町遺跡(本発掘調査B)

所在地 清須市清洲地内
(北緯35度12分36秒 東経136度50分20秒)

調査理由 総合治水対策特定河川事業

調査期間 平成29年7月～平成29年9月

調査面積 320㎡

担当者 酒井俊彦・蔭山誠一



調査地点(1/2.5万「清洲」)

調査の経過 今年度の調査は、五条川に関わる総合治水対策特定河川事業にともなう事前調査として、愛知県建設部河川課尾張建設事務所より愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、平成29年7月～9月に調査を実施した。調査区は五条川左岸で名鉄名古屋本線北側にあり、船枳橋から東に続く道路の南(320㎡)で、西側を17A区、東側を17B区として調査した。

立地と環境 清洲城下町遺跡は五条川中流域に形成された自然堤防と後背湿地上に立地する古代から近世にかけての複合遺跡である。遺跡の中央には、名古屋方面の南南東から北北西に伸びる美濃街道が走っており、美濃街道が五条川を東から西にわたる地点の北に清洲城の本丸が想定されている。

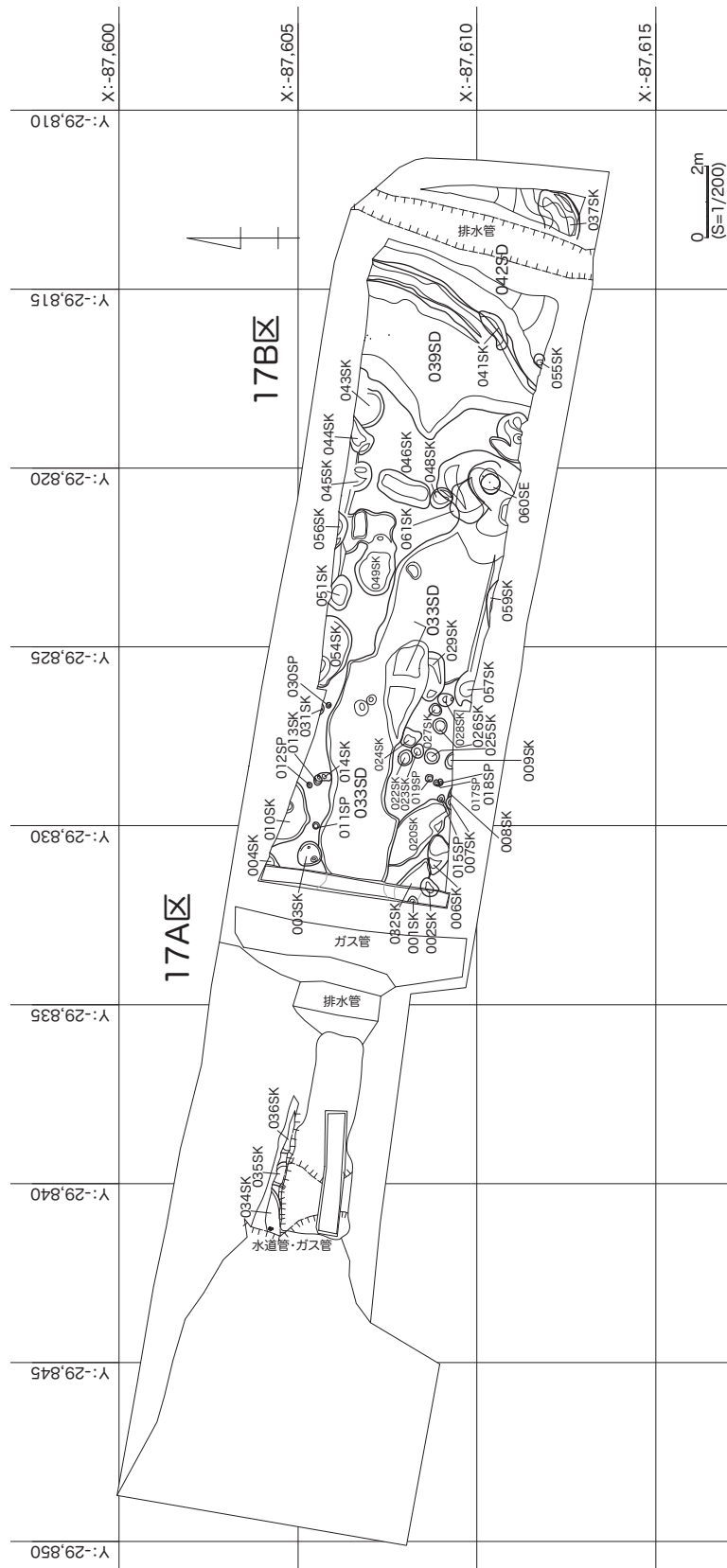
調査の概要 今回の調査では、奈良時代から江戸時代にかけての大きく3時期の遺構と出土遺物が確認できた。

(1) 奈良時代

遺構はみつからなかったが、戦国時代の遺構から須恵器が出土した。17A区の下層の砂の中からほぼ完全な状態で須恵器の鉢が出土した。他にも古墳時代前期初頭のS字口縁台付甕の破片も出土しており、付近の場所から旧河川によって流れてきたものと考えられた。



調査区遠景(東より)



清洲城下町遺跡17区遺構平面図 (1:200)

(2) 鎌倉時代

奈良時代と同様に遺構は確認できなかったが、戦国時代の遺構や下層の河川の砂の地層から山茶碗と小皿、甕が出土した。付近の地点から、旧河川によって運ばれたものと思われる。

(3) 戦国時代～江戸時代前期

井戸1基、溝3条、土坑59基、自然流路1条を確認することができた。戦国時代の遺構では、17B区でみつかった自然流路が最も古く、東北東から西南西に流れていることがわかった。その後自然流路に重複して、井戸や溝が掘られており、土坑がその周囲に多数検出できた。井戸の中には、結桶が据えられていた。また、溝は調査区の北西を区画するようにめぐっており、井戸や土坑と重複するものがあった。出土遺物には、灰釉壺や鉄釉壺、天目茶碗、灰釉皿・播鉢、磁器の小皿、土師器の鍋・皿、小皿、瓦などがあった。

ま と め 清洲城下町遺跡は、これまでに多くの発掘調査が行われ、江戸時代の古城絵図などを参考に戦国時代のおおよその姿が復元されている。今回の調査地点は16世紀末～17世紀初頭における清洲城下町遺跡の中で、中堀と外堀の間にある町家推定域に当たる地点である。その一部を確認できたのみではあるが、戦国時代にさかのぼる河川の痕跡と思われる自然流路や17世紀初頭頃に営まれた区画溝や井戸、土坑を明らかにすることができた。

(蔭山誠一)



17A区西側全景(南より)



17A区034SK遺物出土状況(南より)



17A区東側遺構検出状況(北西より)



17A区東側全景(東より)



17A区下層 (064NR) 出土須恵器



17B区遺構検出状況 (北西より)



17B区全景 (北西より)



17B区井戸0605E (南西より)



17B区下層 (064NR) 全景 (北東より)



17B区下層 (064NR) 土師器出土状況 (東より)



17B区下層 (064NR) 掘鉢出土状況 (北東より)



17B区下層 (064NR) 灰釉皿出土状況 (南東より)

ごでら
牛寺遺跡(本発掘調査A)

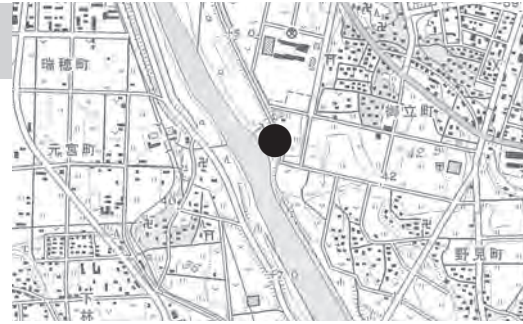
所在地 豊田市御立町地内
(北緯35度4分24秒 東経137度10分11秒)

調査理由 矢作川河川改修

調査期間 平成29年5月～平成29年6月

調査面積 200㎡

担当者 酒井俊彦・樋上 昇



調査地点 (1/2.5万「豊田南部」)

調査の経過 発掘調査は、矢作川河川改修工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局豊橋河川工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業としておこなった。

牛寺遺跡は矢作川左岸の自然堤防上に立地する。1973(昭和43)年度の豊田市教育委員会の調査で古瓦が大量に出土したことから「牛寺廃寺」として認識されたが、寺院としての確実な遺構は確認されていない。その後、1991(平成3)年度に豊田市教育委員会、2005(平成17)年度に愛知県埋蔵文化財センターによって発掘調査がおこなわれ、縄文時代中期後半から中世にかけての複合遺跡として知られている。

調査の概要 このたび、堤防内の矢作川河川敷の地盤掘り下げにともない、遺跡の範囲を確定する必要が生じ、本発掘調査Aを実施することとなった。

結果、かつての矢作川の自然堤防が残る標高37m以上の地点では竪穴建物・土坑・溝などの遺構、平瓦・須恵器・山茶碗などの遺物の出土を確認したが、それより標高の低い箇所においては、明確な遺構や遺物を確認することができなかった。(樋上 昇)



T.T.13全景(南から)



T.T.14全景(南から)



T.T.18全景(西から)



T.T.20全景(南から)

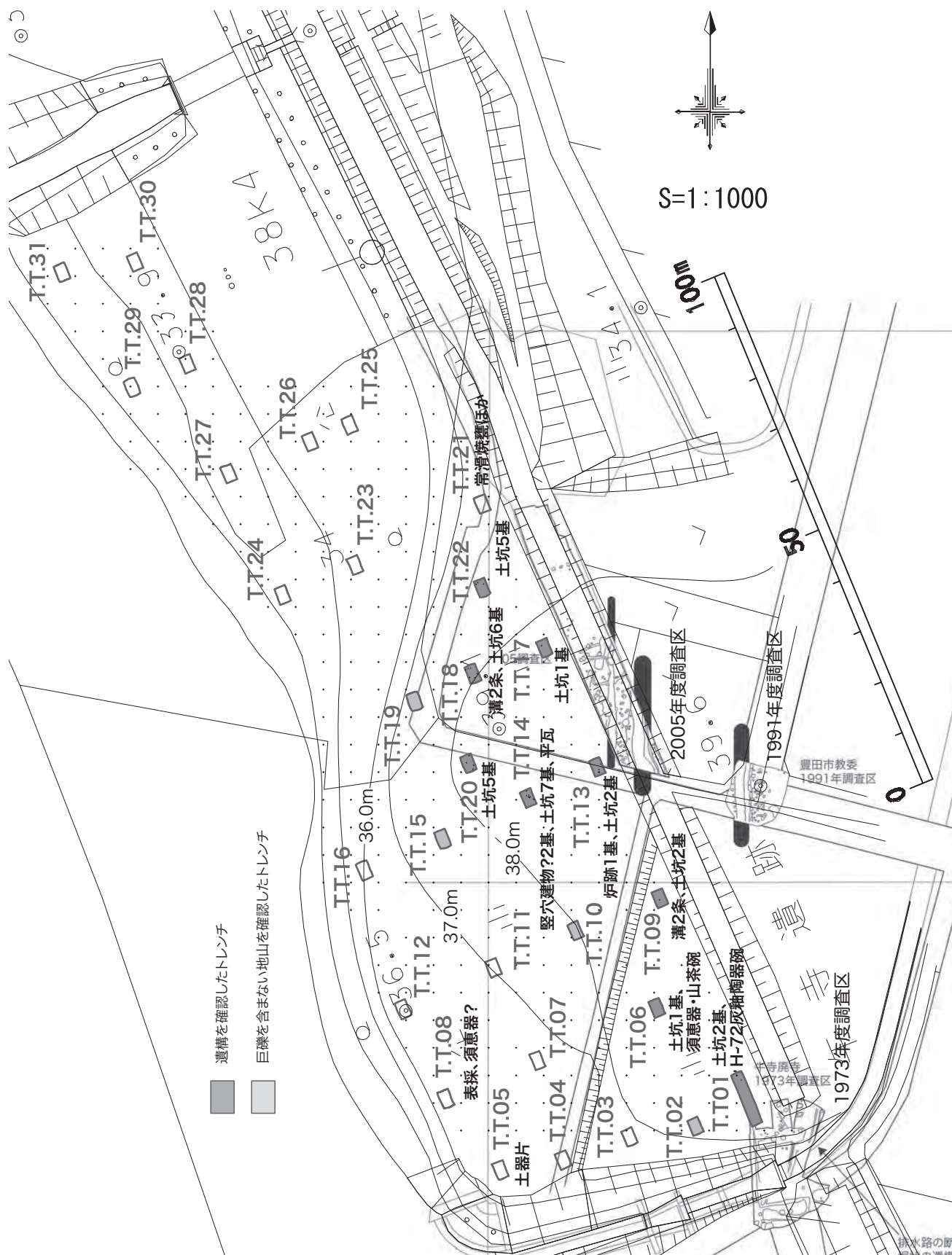


図1 トレンチ配置図 (1:1,000)

むかいだ

向田遺跡(本発掘調査A・B)

所在地 安城市東町地内
(北緯34度55分3秒 東経137度5分51秒)

調査理由 中小河川改良事業(鹿乗川)

調査期間 平成29年10月～平成30年1月

調査面積 1,524㎡

担当者 酒井俊彦・樋上 昇



調査地点(1/2.5万「西尾」)

調査の経過 発掘調査は、鹿乗川の改修工事に伴う事前調査として、愛知県建設部河川課知立建設事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業としておこなった。

立地と環境 向田遺跡は碧海台地東側の縁辺に位置し、矢作川右岸の氾濫原平野に立地する。上面での遺構検出面の標高は約7.5mを測る。

調査の概要 向田遺跡は岡崎市南西部から安城市南東部に展開する鹿乗川流域遺跡群の北群と南群のちょうど中間に位置し、平成12年度に安城市教育委員会によって実施された発掘調査において、その存在が確認された。また同年度におこなわれた愛知県埋蔵文化財センターの範囲確認調査においても遺構の存在が確認され(今次調査の110SKがそれにあたる)、その遺構が存在する区画1,500㎡を今回、本発掘調査Bとして実施した。また、遺跡の南方への広がりを確認するため、本発掘調査Bに先だって24㎡(4×3mトレンチ2ヶ所)を、本発掘調査Aとして掘削した。

その結果、厚さ約0.5mにおよぶ暗茶褐色土～黒色土の堆積層を境に、上面—中世～近世、下面—古墳時代初頭～前期の2時期の遺構面を確認した。

上面遺構 上面遺構は溝と土坑からなり、溝は北で20～25° 東に振れた、現在の鹿乗川とほぼ同じ軸線に乗っている。南北方向の溝03SDが調査区を南北に縦断し、北でそれに直交する03SDに接続する。



向田遺跡 遠景(南より)

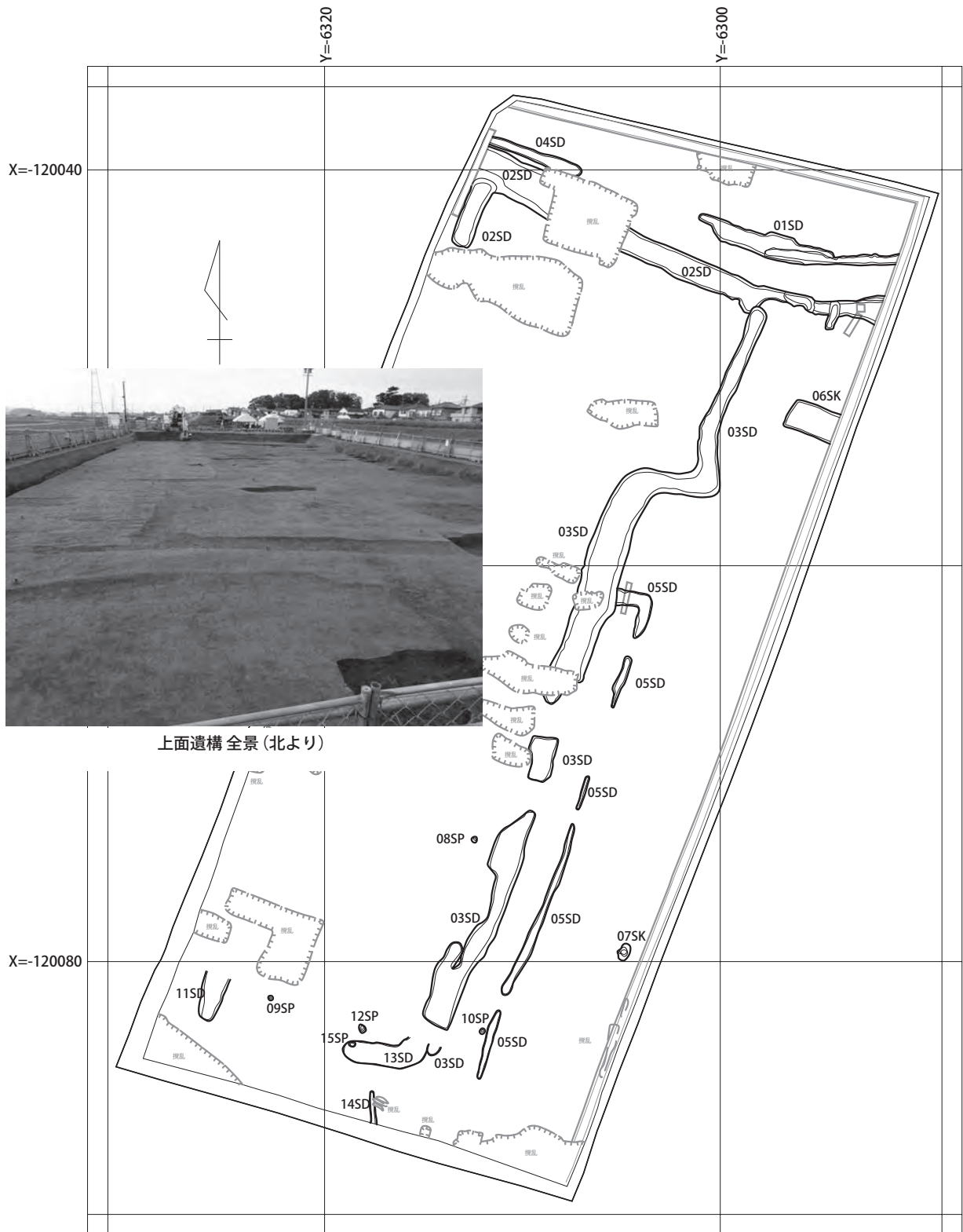


図1 上面遺構全体図 (S=1:300)

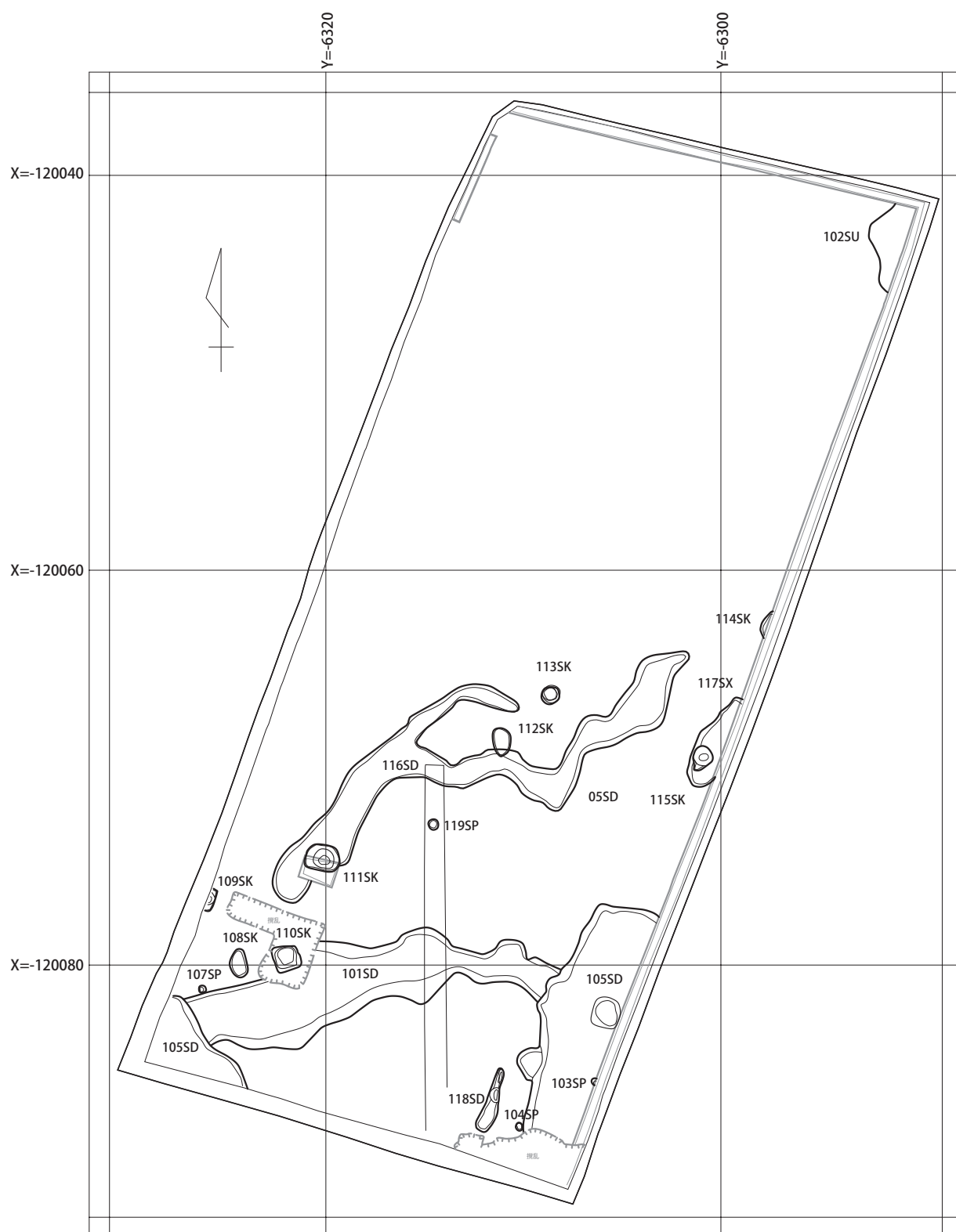


図2 下面遺構全体図 (S=1:300)

下面遺構 下面遺構は、調査区のほぼ南半部のみに展開する。かつての鹿乗川の流路の一部とみられる105SDが調査区南東隅を北東から南西方向に走り、ここからオーバーフローした流路の痕跡とみられる溝101SDと116SDが、やはり北東から南西方向に伸びている。これら溝群のうち、101SDと105SDの最上層からは古墳時代前期を中心とする土器片が少数出土している。

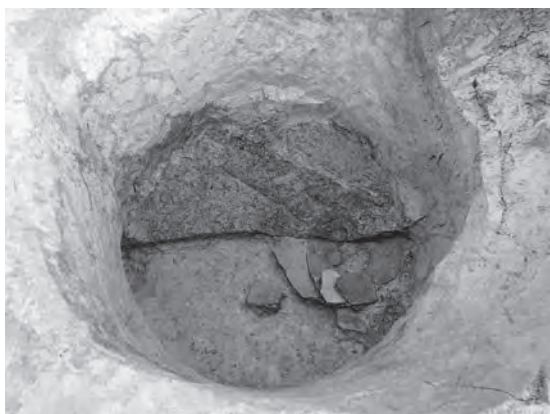
また、これら溝群と重複して、8基の土坑を確認した。うち、110・111・113SKからは、古墳時代初頭～前期とみられる土器群が出土している。なかでも111SKからは木質遺物とともに、上層と下層に分かれて甕が出土しており、特に下層の完形の甕2点が注目される。



110SK 遺物出土状況 (北東より)



111SK 遺物出土状況1 (南より)



113SK 遺物出土状況1 (北西より)



111SK 遺物出土状況2 (南より)



113SK 遺物出土状況2 (北東より)



111SK 遺物出土状況3 (南より)

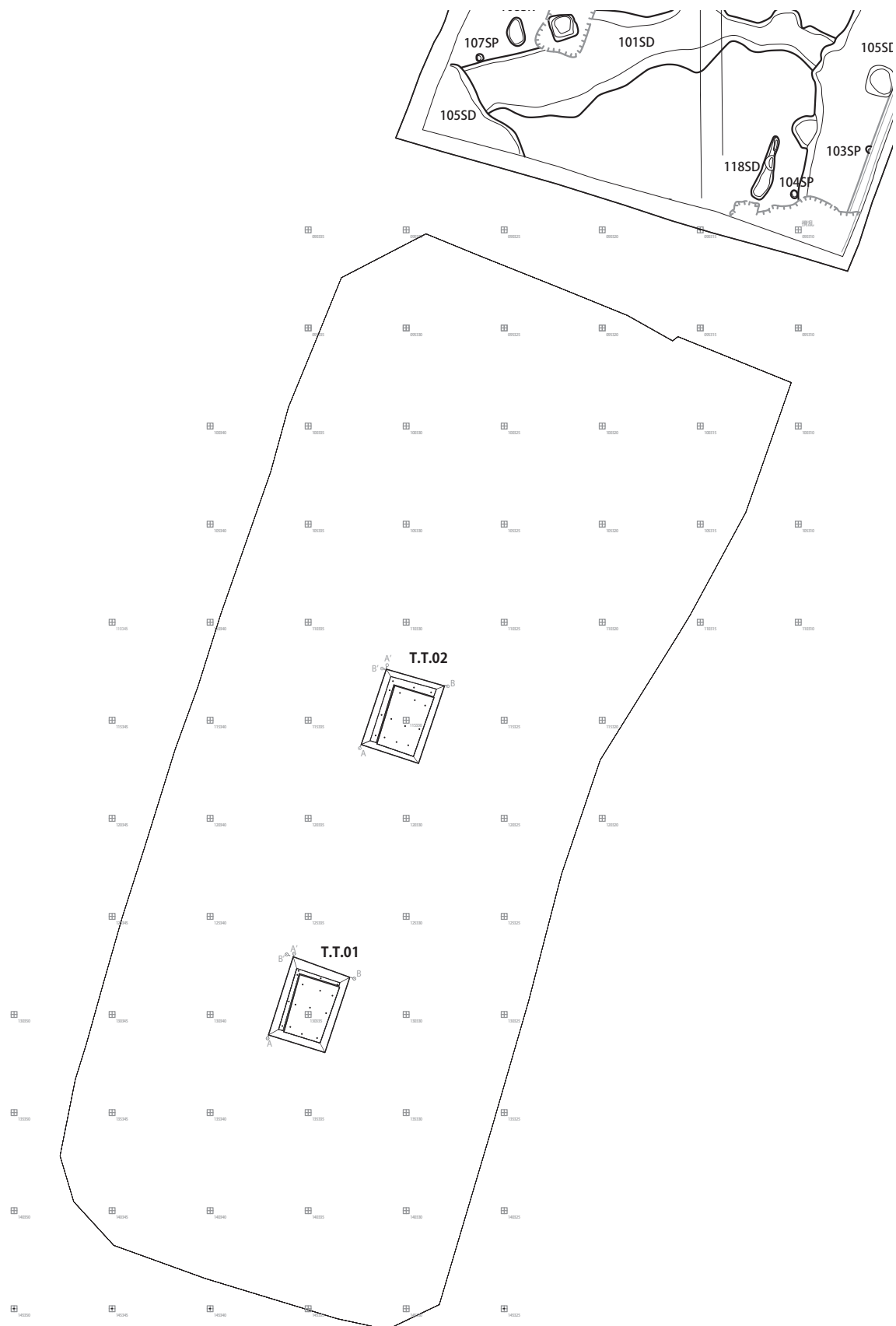


図3 本発掘調査Aトレンチ配置図 (S=1:300)

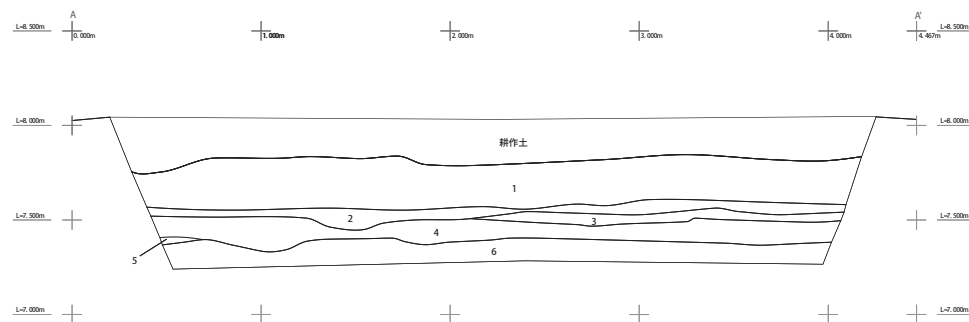
さらに、調査区の北東隅には地山面の高まりがあり、ここからは屈折脚高杯を含む古墳時代前期後半を主体とする土器集積(102SU)を確認した。この土器集積と南の土坑群との関連性は明確ではなく、むしろ102SUより北東側に伸びていく微高地の存在が想定される。

本発掘調査A 本発掘調査Aは、前述のように本発掘調査Bの調査区の南に接する区画において、4×3mのトレンチを2ヶ所設定して掘削をおこなった。

結果、T.T.01・T.T.02の両トレンチともに、本発掘調査Bにおける下面遺構の地山面に相当する灰黄色砂質シルト層の上面にて精査をかけたが、遺構は確認できなかった。

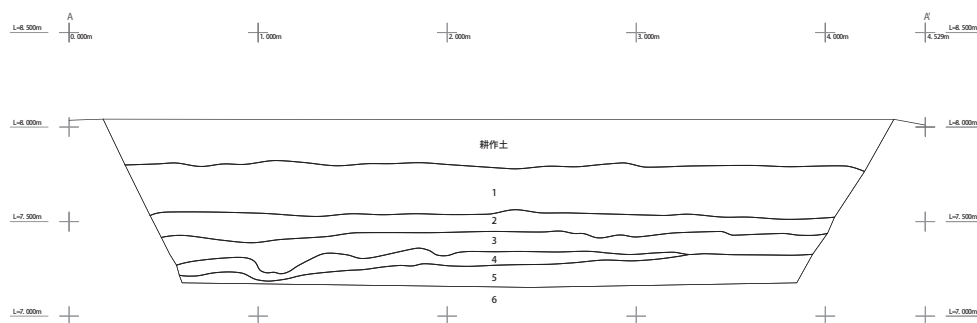
また、その上層で、本発掘調査Bでは下面の遺物包含層に相当する暗灰黄色砂質シルト層からは若干の遺物が出土しているが、黒褐色シルト層からの出土は無かった。

これらのことから、本発掘調査Bの南半部で確認した土坑を主体とする遺構群の広がり、南の本発掘調査A地点にはおよんでいなかったものと考えられる。(樋上 昇)



T.T.02

耕作土 2. 5Y4/1 黄褐色粘質土
1層 2. 5Y5/3 黄褐色シルト 鉄分含む
2層 2. 5Y5/2 暗灰黄色シルト 鉄分含む
3層 10YR3/2 黒褐色シルト 鉄分含む
4層 2. 5Y7/2 暗灰黄色シルト 鉄分3層より少ない
5層 5Y6/2 オリーブ灰色細粒砂
6層 10YR4/1 褐灰色粗粒砂



T.T.01

耕作土 2. 5Y4/1 黄褐色粘質土 雲母細粒含む、2層よりも鉄分少ない
1層 2. 5Y5/3 黄褐色シルト 鉄分含む
2層 2. 5Y5/2 暗灰黄色シルト 鉄分含む
3層 10YR3/2 黒褐色シルト
4層 2. 5Y7/2 暗灰黄色シルト
5層 5Y6/2 オリーブ灰色細粒砂
6層 10YR4/1 褐灰色粗粒砂

図4 本発掘調査Aトレンチ土層断面図 (S=1:40)

おおはた
大畑遺跡(本発掘調査B)

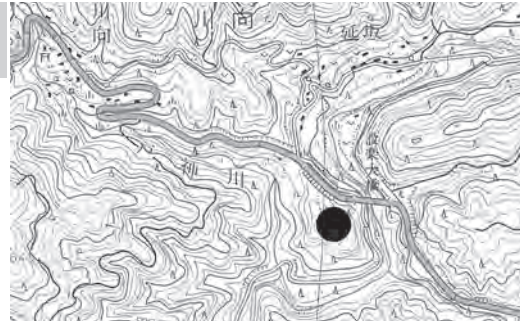
所在地 北設楽郡設楽町川向地内
(北緯35度6分33秒 東経137度33分58秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成29年5月～平成30年1月

調査面積 13,950㎡

担当者 鈴木正貴・鈴木恵介・早野浩二・永井邦仁・松田訓・永井宏幸



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は、設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境 大畑遺跡は、境川と戸神川の合流点北東側に位置している。両河川は遺跡を挟んで標高約370mの谷底を流れているが、遺跡はそこから崖や急斜面で隔てられた山地の頂部に所在し、標高は430～446mである。その頂部には、東西2か所に南北方向に細長い平坦面を有する尾根があり、それらにはさまれて南側へ抜ける谷地形が存在する。この谷地形の奥部は、くぼ地状になっており、そこを中心に黒色土が堆積している。遺跡はこの谷地形を中心として広がっていると想定されている。なお、遺跡南側の境川沿いには川向東貝津遺跡、同西側の戸神川沿いに大栗遺跡があり、両遺跡では平成27～28年度に行われた発掘調査で縄文時代中期の竪穴建物跡などが検出されている。

調査の概要 調査区は、設楽ダム常時満水時の水位である標高438m以下で設定された。調査は谷地形の最下部を南北に伸びる作業用道路を挟んだ東西で区切られた東側の17A・B区から着手し、次いで西側の17C・D区へ進んだ。その後、先述のくぼ地に堆積した黒色土の下面で遺構検出を行った。検出された主な遺構は、縄文時代の竪穴建物跡12基の他に竪穴状遺構1基や集石炉1基、陥し穴8基などがある。

A 区 A区は東側尾根周辺の斜面に設定された。その南端には片麻岩を主体とする岩盤が露頭し、この岩盤と上部の粘土層(基盤層)の境界付近では常時湧水が発生している。検出された主な遺構は竪穴建物跡1基と性格不明土坑1基、陥し穴2基と少ない。しかし尾根上方の斜面地では、凝灰岩の石器剥片や縄文時代前期の土器の他に灰釉陶器碗(黒笹90号窯式期)も出土している。これらの遺物は、調査区外となっている東側頂部の平坦面から流出したものと考えられ、当該地点にも遺跡が広がっていることを示している。

竪穴建物跡 竪穴建物跡065SIは尾根筋のわずかな緩斜面(標高約432m)に単独で立地している。平面形は若干いびつな円形もしくは多角形を呈し、長径4.4mを測る。緩斜面を掘り込んでいたため遺構検出面からの深さは北端で0.48mであるのに対して南端では数cmしかない。壁溝はなく柱穴4基と底面中央部やや北寄りに一辺0.5～0.6mの方形石囲炉がある。石囲炉は板状の片麻岩を組み合わせたもので北東隅に摺石、北西隅に副炉がそれぞれ設置されている。副炉は石囲炉の外側に板状の礫3点を組み合わせたものであるが、その内部には顕著な焼土や炭化物はみられず、その脇で石鏃1点が出土している。なお、石囲炉本体においても多量の炭化物はなく、底部の礫が一部赤変しているのが確認されたのみである。竪穴建物跡の埋土は多量の炭化物や炭化材を含んでいるが、出土土器はごくわずかである。時期は縄文時代中期末と考えられる。

- D 区** 遺跡南西部に設定されたD区では、縄文時代の竪穴建物跡2基、時期不明の竪穴状遺構1基が検出された。竪穴建物跡440SIは、谷地形西側の尾根上平坦面（標高約433m）に位置する。平面形はやや歪な六角形であり、長径3.8mを測る。遺構検出面からの深さは最大で約0.3mである。壁溝はなく、主柱穴を特定しにくい。壁に沿って8基のピットが検出されており、これが関係しているものと考えられる。また当該遺構では炉も検出されず、焼土や炭化物の出土も少ない点が特筆される。出土遺物は埋土中から縄文土器の小片が出土しているのみで中～後期と推測される。竪穴建物跡490SIは、440SIの東側斜面を下った標高約432mに立地する。平面形は楕円形に近い隅丸長方形で長径4.0m、短径3.3mを測る。遺構検出面からの深さは最大で約0.4mである。当該遺構も壁溝や炉はなく主柱穴が特定しにくい。埋土中の出土土器はわずかであるのに対し、白色の凝灰岩を中心とする石器剥片が多くみられる点が特徴である。当該遺構については詳細な時期は特定できていない。この他440SIから約20m南方に竪穴状遺構370SXがある。当該遺構の平面形は隅丸長方形で長径5.4m、短径4.2mを測る。壁溝に相当する小溝が一部にみられ、底面の一部で焼土塊が検出されている。しかし顕著な遺物がなく、縄文時代の竪穴建物跡とはしがたい。

黒色土とくぼ地

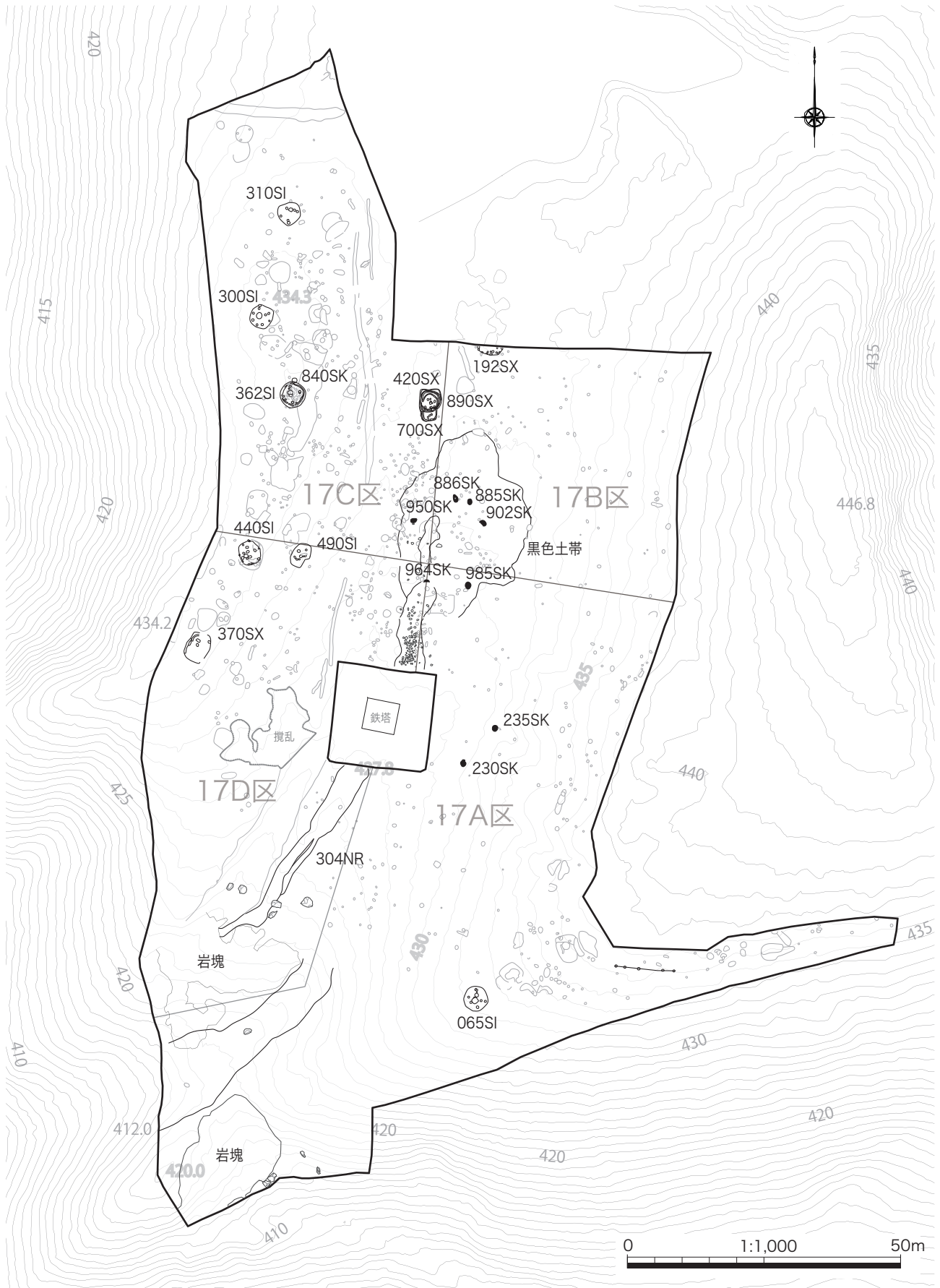
遺跡中央の谷地形とくぼ地に広がる黒色土の範囲は約700㎡である。黒色土の上面では顕著な遺構や遺物が検出されていない。くぼ地では黒色土が最大で約1.1m堆積しているが、同層中からの出土遺物は少なく縄文土器の小片や石器剥片が出土しているのみである。これに対して黒色土下の基盤粘土層上面で行った検出によると、くぼ地から南へは幅約5.0mの自然流路が約75m延びており、若干砂の混じった黒色土の堆積とともに尾根上からの転石が多数みられる。湧水を利用する施設の存在も想定されたが、顕著な遺構や遺物はみられなかった。一方、くぼ地の特に縁辺では陥し穴6基が検出され、磨石や石皿など堅果類の加工を思わせる遺物が出土しており、湿地の周辺が活動範囲になっていたことが考えられる。（永井邦仁）

- C 区** C区は遺跡北西部の主に丘陵頂部周辺に設定された。遺構は縄文時代の竪穴建物跡8基、近世以降の道路状遺構が検出された。竪穴建物跡は、300SI、362SIが石囲炉を伴い、420SI、890SI、1030SI、700SI、1000SIはほぼ同位置で重複して検出されている。

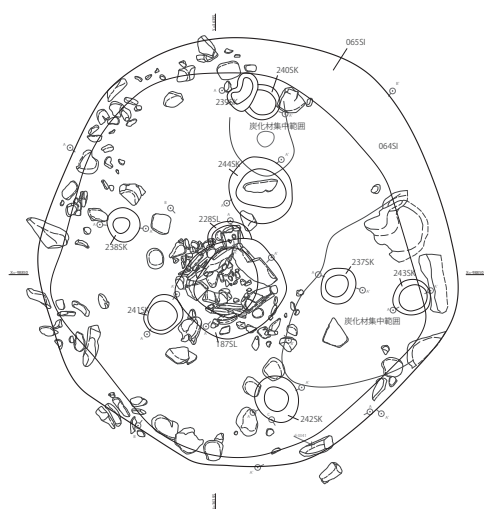
竪穴建物跡 300SI

300SIは平面形が長辺4.1m、短辺4.0mの隅丸方形もしくは多角形の形状を為し、内部の石囲炉390SLは円形もしくは多角形となっている。遺構検出面からの深さは、西端で0.1m、東端で0.2mと底面が緩やかに東へ傾斜している。埋土には焼土、炭化物、炭化材、黒曜石、熔結凝灰岩の破片や剥片が多数検出された。柱穴は831SP、832SP、833SP、834SPの4基が検出され、深さはいずれも0.4m以上を測る。石囲炉390SLは、28点の礫によって上端が囲まれ、竪穴建物跡床面からの深さは最も深い部分で28cmを測り、内部は側面から底面にかけて非常に強く被熱している。礫の設置に伴う掘方は礫の後背部に確認できず、炉の上端側面に貼り付けるような方法で構築されたようである。竪穴内では周溝は検出されていない。また、西側の丘陵頂部付近の竪穴建物跡の内、遺構検出面の標高が最も高いのが300SIで、433.7m付近に位置している。

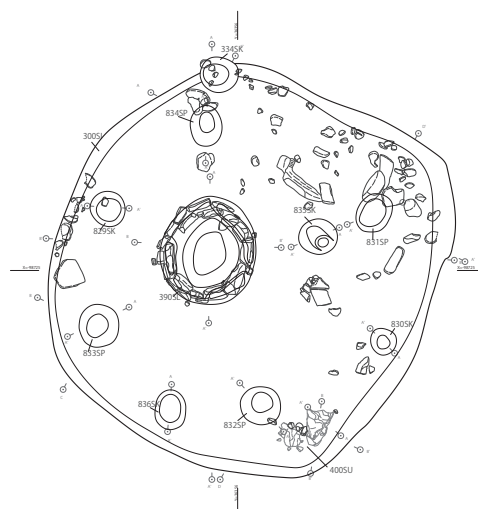
300SI検出時に称名寺式期の縄文土器破片が検出されていることから、300SIに重複する他の遺構の存在も想定されたが、炉と同一の底面南東隅部では山の神1式期の深鉢が口縁部を北側に向けて倒れた状態で検出されている。炭化材の多さから300SIは火災住居である可能性も指摘されているが、出土した深鉢は二次被熱は見られないことから、300SI廃絶後に設置された可能性も伴う。石囲炉や柱穴を伴う竪穴建物跡300SIはこれに基づい



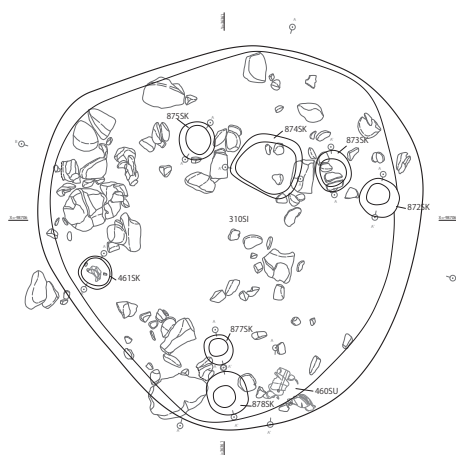
大畑遺跡遺構全体図 (S=1:1000)



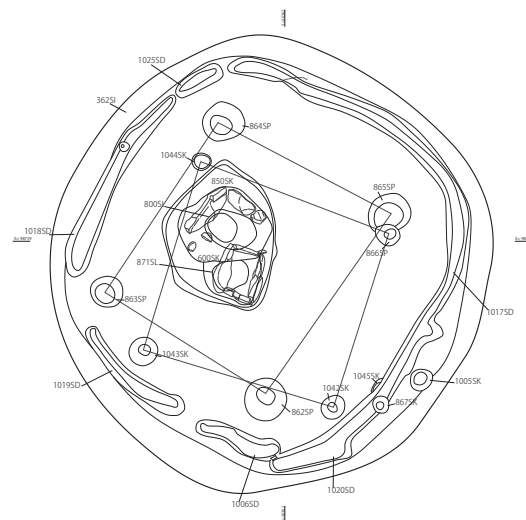
豎穴建物跡 065SI



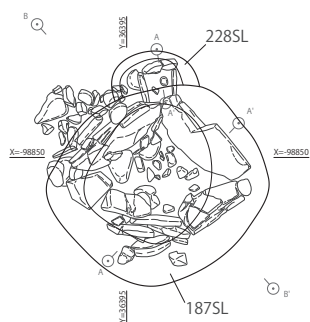
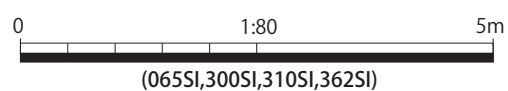
豎穴建物跡 300SI



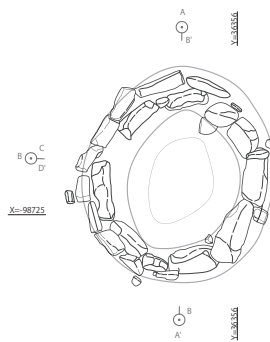
豎穴建物跡 310SI



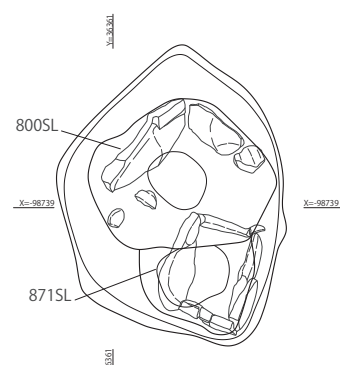
豎穴建物跡 362SI



065SI 石囲炉



300SI 石囲炉



362SI 石囲炉



た時期の遺構と推定される。

3 1 0 S I 310SIはC区丘陵頂部付近の竪穴群では最北に位置する。平面形は角の丸い五角形状で、長辺4.1m、短辺4.0mを測る。竪穴建物跡の底面は北西方向に向かって傾斜し、遺構検出面からの深さは0.2m～0.3mを測る。

竪穴内南東隅部では深鉢が口縁を西に向けて倒れた状態で検出された。土器の外形としては形状を保っておらず、扁平な状態となっていた。この土器については、親田式もしくは中富式と指摘されている。

炉は検出されなかった。柱穴は明確なものが875SKと877SKの2基確認され、それとは別に竪穴内南端付近に土坑878SKが検出された。878SKは竪穴底面からの深さ0.3mを測り、埋土からは土器破片も検出されている。竪穴に付属する遺構と考えられるが性格は不明。また、竪穴内の中央より北西側に偏在する大小多くの礫が検出され、これらについては屋根材の一部との指摘もある。

3 6 2 S I 362SIは遺跡西側の丘陵頂部中央付近に位置する竪穴建物跡である。数次に渡り改築がこなわれているが、最初期の形状は平面形が長辺4.68m、短辺4.57mを測る隅丸方形。遺構検出面からの深さは0.4m。検出段階で362SI上には石列450SX、北側に接する石敷炉840SLが確認され、炉内部の下位は礫を組み合わせ、被熱した状態が確認できる。平面の切り合いから840SLは362SI埋没後の構築であることが確認されている。362SIとの切り合い関係から縄文時代中期後半以降の時期を想定している。また、450SXは362SIが完全に埋没した後に北半部分縁辺部に沿うように組み合わせて据えられており、362SIの廃絶に伴う儀礼行為と考えられる。同様に840SLについても362SIに近接した位置に構築されたことと合わせて、362SI廃絶に関連する遺構と推定している。

3 6 2 S I 362SIは建て替えが行われ、合わせて炉が2基、柱穴8基が検出された。炉800SLが最初期の炉であり、これに伴う柱穴は862SP、863SP、864SP、865SPである。800SLの南東側の炉石を外し、新たに設けられたのが871SLである。これに伴う柱穴は800SLに伴う柱穴よりも径が小さな866SP、1042SP、1043SP、1044SPである。それぞれの石囲炉に伴う柱穴が存在することから、800SL段階の建物は、一旦廃絶し、871SLと共に新たな柱穴を用いた建物が再度構築されたことが想定される。362SI掘削中に断面において確認された焼土層600SLも一旦は炉と推定したが、結果的には871SLの焼土を西側に掻き出したものと見られた。この焼土層が800SLの上位に堆積していることから800SLが先行した炉跡であることが確認できる。

周溝1017SD、1018SD、1019SD、1020SD、1025SDはほぼ底面全周に巡り、南西と北西で一部途切れる。362SIの断面で確認された埋没状況から、これらの周溝は800SL使用時の初期段階のものと考えられ、前述の600SLの焼土堆積状況と考え合わせて871SL段階では底面が数cm高い位置で使用され、周溝は掘削されていなかったと考えられる。

4 2 0 S I 420・700・890・1000・1030SIの重複した竪穴建物跡。周溝を伴う700SI、掘り込みの浅い1000SIの形状は、これらの遺構の北東側に位置する192SIも同様に浅い掘り込みで構築されており、関連も想定される。

重複関係は420SIが最新、890SI・1030SIがそれに続き、700SI・1000SIが古い段階の遺構と想定される。

420SIは一辺約3.3m、方形の掘方をもつ竪穴建物跡である。遺構検出面からの深さは0.3m。この遺構に伴う底面の遺構は見られない。断面観察から890SIや1030SIの埋没後に

再掘削し、構築された可能性が高い。

890SI 竪穴建物跡 890SIは推定直径3.3mの円形の掘方をもつ竪穴建物跡である。遺構検出面からの深さは0.35m。掘方の北側は420SIによる掘削にて欠損し、南側の掘方を残存する。底面には円形に巡る周溝を配する。小規模な土坑も周溝内に位置することから、底面で検出されている遺構は890SIに帰属する可能性がある。時期は420SIに先行する。

1030SI 竪穴建物跡 1030SIは一辺約3.6mの推定隅丸方形の掘方をもつ竪穴建物跡である。遺構内の多くは420SIや890SIによって欠損、北側と東西の掘方が残存し、南側の掘方は890SIによって欠損する。

1000SI 竪穴建物跡 1000SIは一辺約3.6mの方形の掘方をもつ竪穴建物跡である。420SI他の重複する竪穴状遺構の中では最も北に位置する。遺構面からの深さは深い部分でも0.1m程度である。南端部は直接的には890SIによって欠損している。北辺で検出されている底面が他より浅く、他の遺構に先行して構築されていたと考えられる。

700SI 竪穴建物跡 700SIは残存長3.0mを測る、南北方向に楕円形もしくは隅丸方形を呈する竪穴建物跡である。深さは浅く、遺構面より0.1m程度である。1000SIとの直接的な切り合いは確認できず、420SI、890SI、1030SIによって北半部を欠損し、これらに先行する時期の遺構と考えられる。

B 区 B区は東側の尾根に向かって登る斜面部を中心とする調査区で、明確な遺構は192SIがある。調査区内の高低差は大きく、最高で437m、最低で428mとなっている。

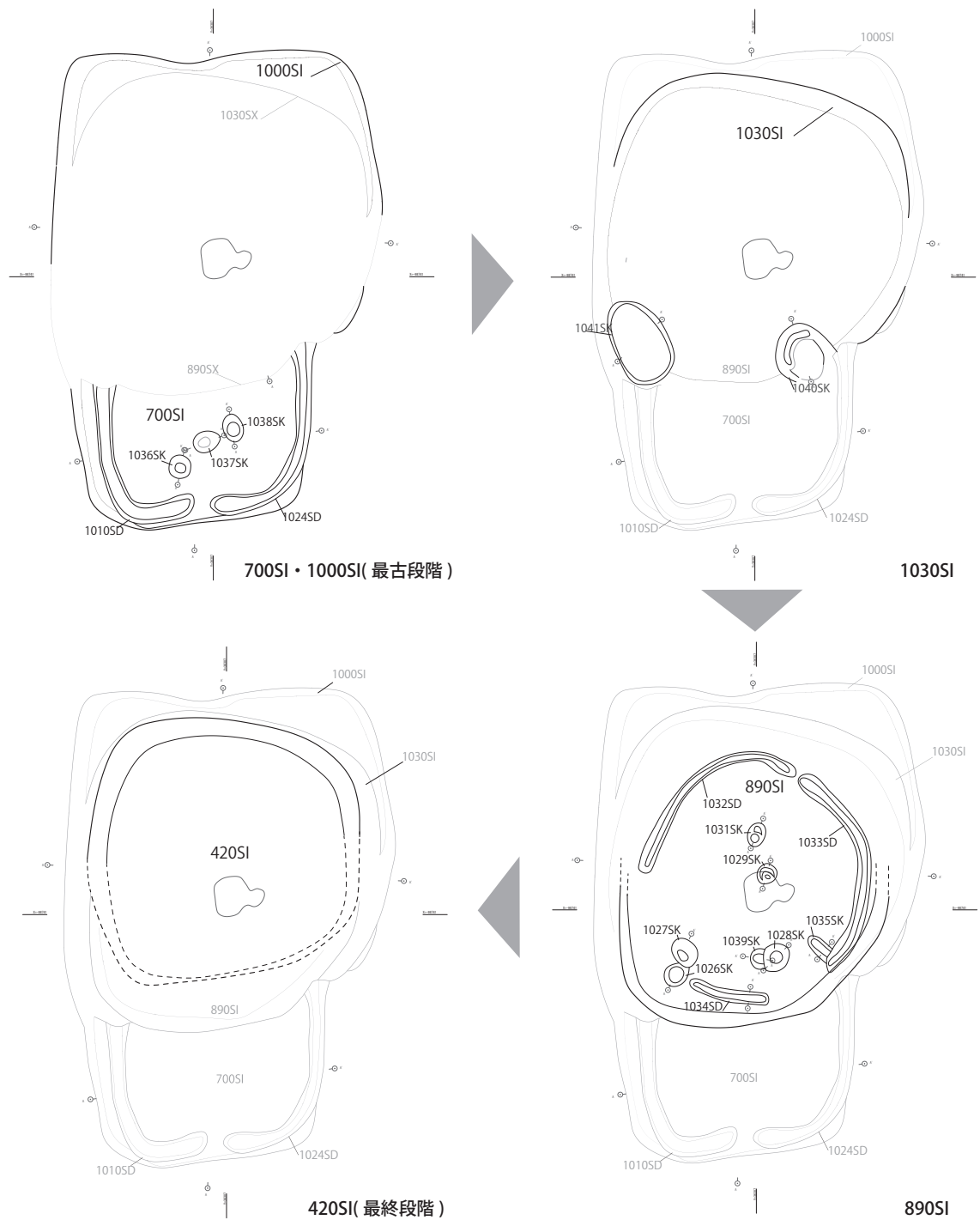
192SI 竪穴建物跡 192SIはB区北端で検出された竪穴建物跡である。調査区北へ残存部分が連続し、現状では南辺部分が検出された状態。遺構検出面からは非常に浅く、周溝の底部や小規模な土坑が検出された。断面では遺構の深さも0.1m程度が確認できるのみである。遺物は黒曜石や白色風化石材等の剥片が確認できた。検出中に出土した土器破片は北屋敷期相当との指摘を受けた。

ま と め 大畑遺跡の遺構分布状況は、西側のC・D区の丘陵頂部付近と中央の黒色土が分布するE区の谷部周辺に遺構が集中し、南部のA区内、丘陵先端部に離れて竪穴建物跡が検出された。調査区周辺にはAB区の東側に未調査の丘陵頂部が存在し、これと遺構の検出されたC・D区の西側丘陵部が対になって、E区の中央谷部を形成する地形であり、A区065SIの丘陵尾根上位部分では石器剥片等の遺物が周囲に比べて多く検出されたことも合わせて、東側丘陵部に遺構が存在する可能性は高く、これも含めて一連の遺跡と考えられる。

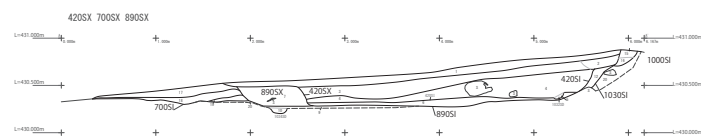
竪穴建物跡は合計12棟が検出されたが、検出された土器は縄文時代中期後半～後期と見られ、特に中期後半には複数の竪穴建物が並存する時期があったことが想定される。さらに、065SIの副炉や300SIの円形石囲炉など特徴的な構造の炉を持つ竪穴建物跡等、竪穴建物ごとに炉の有無や炉の形状などに差があることが判明した。また、420SIをはじめとする竪穴建物跡は5棟が重複した状態で検出されており、他の竪穴建物跡が時期が異なっても分散した位置を示すのに対して、同じ位置において幾度も建て替えられたことから、利用目的と位置の強い関連が想定される。

以上のように、調査区内の様々な地形に応じた遺構・遺物が検出されたことから、縄文時代中期から後期にかけての当該地域における丘陵部土地利用状況について有用な事例が調査できたものと思われる。

(鈴木恵介)

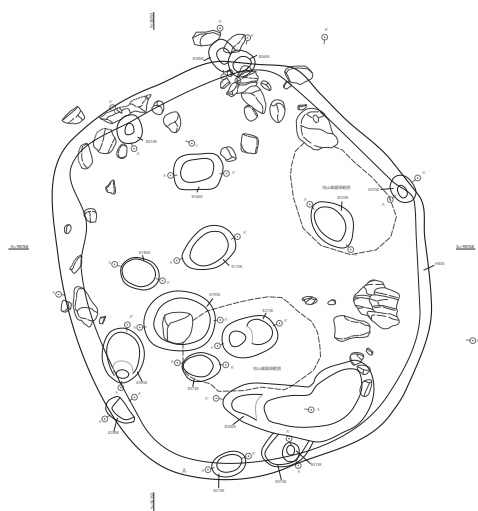


竪穴建物跡 420SI・700SI・890SI・1000SI・1030SI 変遷図 (古い方から順に時計回りに配置 :S=1/80)

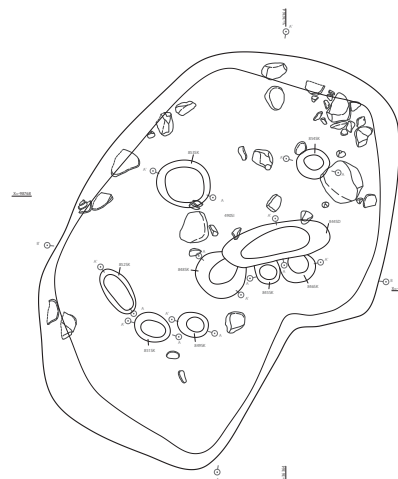


竪穴建物跡 420SI・700SI・890SI・1000SI・1030SI 南北方向断面図 (S=1/80)

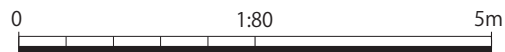
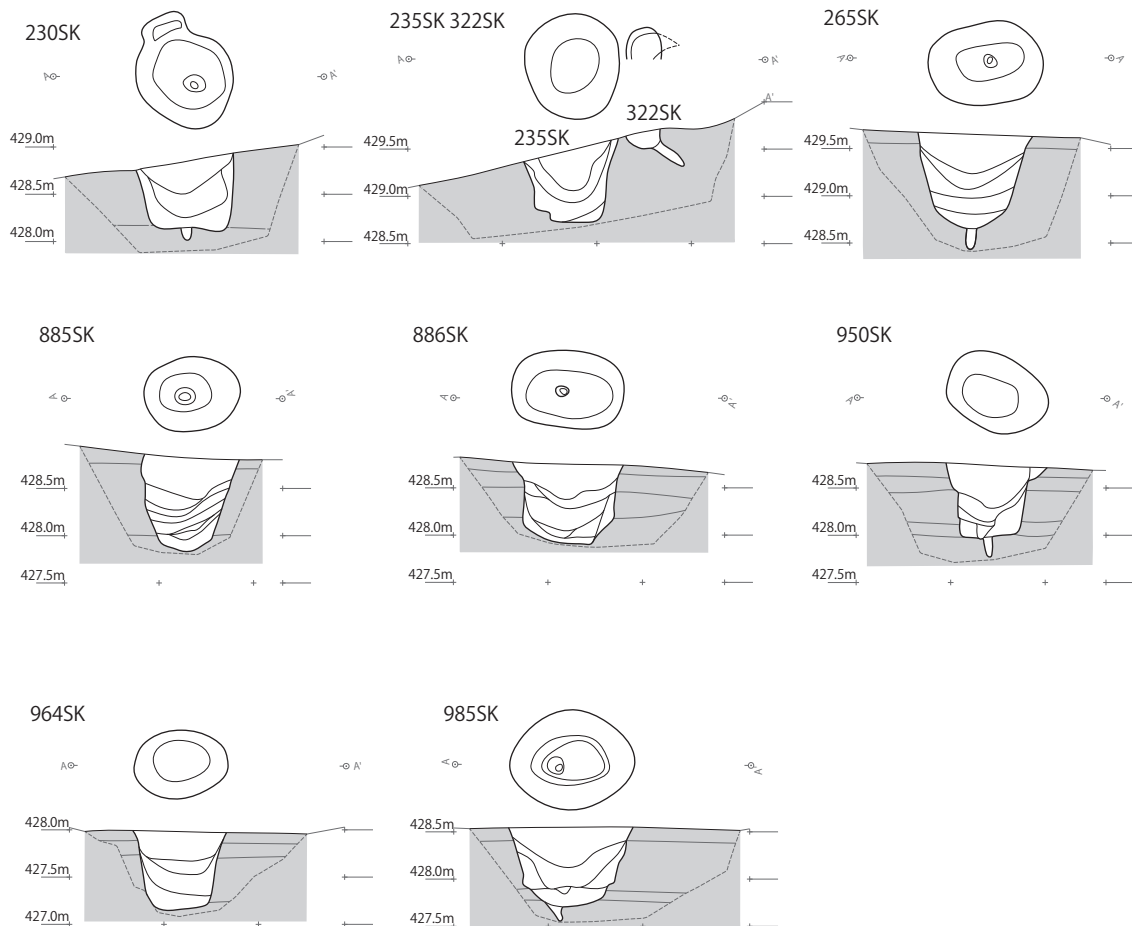




竪穴建物跡 440SI(S=1/80)



竪穴建物跡 490SI(S=1/80)



大畑遺跡陥し穴 (S=1/80)



大畑遺跡遠景（北から）



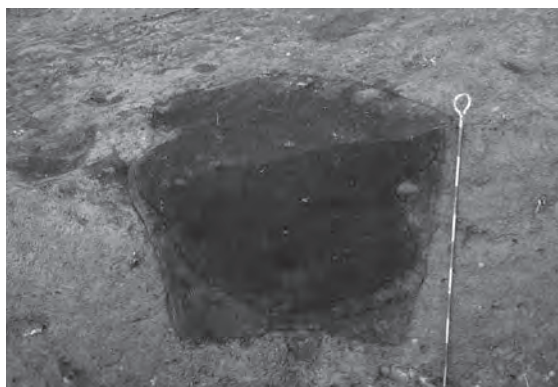
065SI 完掘（北から）



065SI の炉跡（東から）



440SI 完掘（北から）



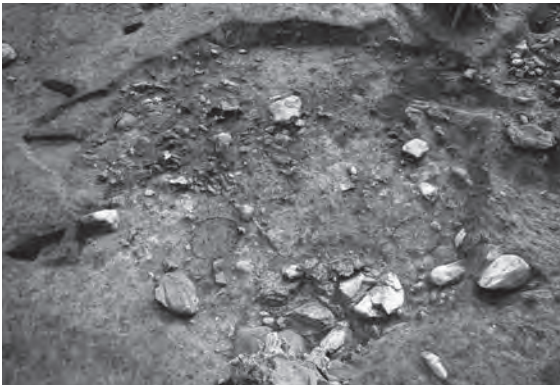
230SK 断面（南から）



300SI の炉と柱穴（東から）



300SI の石囲炉 390SL（東から）



310SI 柱穴検出状況（北西から）



362SI に隣接する 840SL（北西から）



362SI 上面の石列 450SX（西から）



362SI の炉と柱穴（東から）



362SI 内の石囲炉 871SL（右）・800SL（左 南から）



420SI・700SI・890SI・1000SI・1030SI の重複（東から）

マサノ沢遺跡(本発掘調査B)

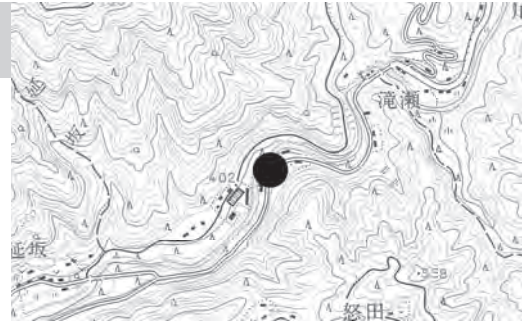
所在地 北設楽郡設楽町大字小松字マサノサワ
(北緯35度7分4秒 東経137度34分35秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成29年7月～平成30年1月

調査面積 2,050㎡

担当者 鈴木正貴・永井宏幸



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 遺跡は大正12年頃の開墾で発見され、ついで昭和23から24年の開墾時に多量の土器・石器が出土し注目された。その後、平成17年に行われた県道設楽根羽線の改修工事に伴う試掘および立会い調査では、明確な遺構・遺物包含層は認められなかった。平成29年度発掘調査A(範囲確認調査)の成果を踏まえて本年度の調査は、国土交通省による設楽ダム建設事業関連埋蔵文化財調査として、愛知県教育委員会を通じた委託を受けて平成29年7月から平成30年1月にかけて実施した。

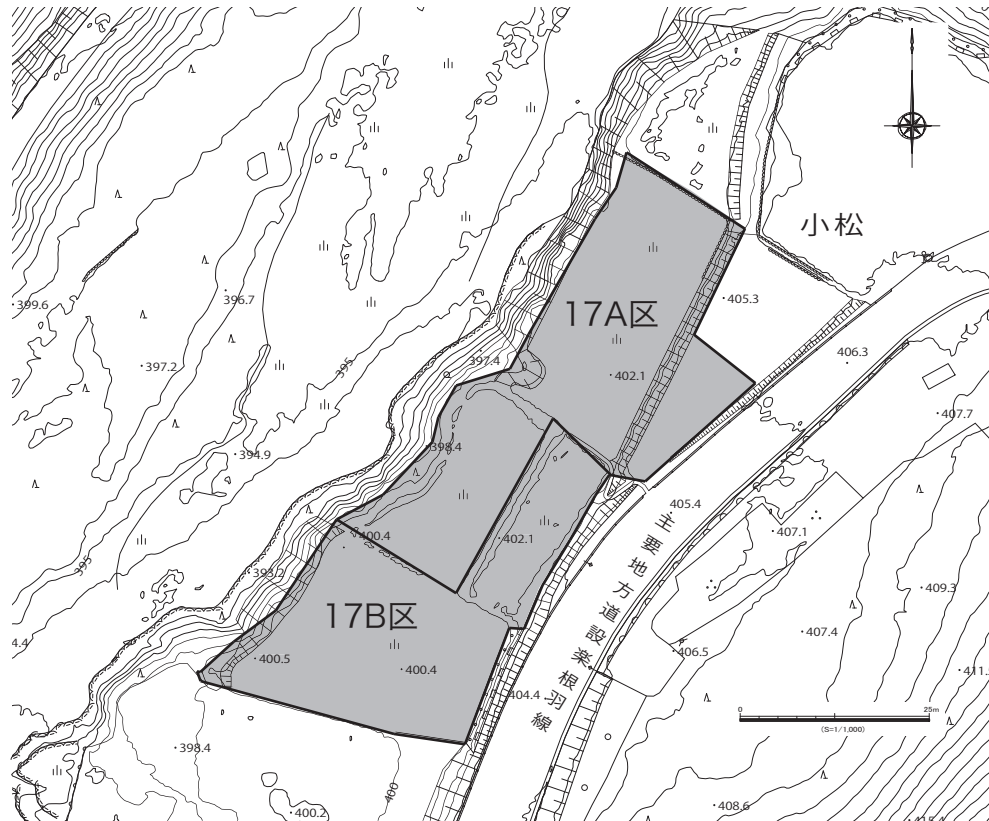
立地と環境 遺跡は、豊川水系に属する寒狭川の支流である境川の左岸に形成された幅狭な段丘面に位置する。遺跡付近は山腹に造成された県道によって地形が改変されたものの、境川が大きく蛇行する地点にあたり、北東から南西にかけて広がる緩やかな緩斜面に立地する。調査着手前は県道をはさんで山側に茶畑と山林、川側に水田・畑地および宅地があった。調査対象地の標高は一番高い道路際の北東寄り地点で405m前後、川側の低い南西寄り地点で400m前後である。

調査の概要 遺跡の基本層序は、A区北東の最上段部分を除き概ね以下の土層が上位から下位へ堆積していた。現況の水田、畑地などを中心とする耕作土、床土の下に、黒色土層(縄文晩期末～弥生前期を中心とする包含層)、褐色土層(縄文後期を中心とする包含層)、褐色～黄褐色土層の漸移層(基盤層)、黄褐色土層(基盤層)と続く。耕作土+床土を重機により取り除いた後、遺構検出を行った。しかし、黒色土～褐色土層までの上位層は安定しておらず、現代の開墾などによって削平されていた。

調査の結果、縄文時代後期を中心とする墓地関連遺構と縄文時代晩期後葉から弥生時代前期にかけての土器棺墓が確認された。以下、その概要を示す。

A区北東の県道に接する緩斜面地は、縄文時代後期から近世の遺物を含む包含層が確認された。調査当初は県道拡幅時の造成により大きく削平されていたと考えていた。しかし、この造成土の下位から現代の開墾時による整地土が厚く堆積しており、現況より1m以上現代の堆積があった。調査区土層断面観察の結果、この堆積は大きく地盤を改変するのではなく、緩斜面地に整地土を盛ったと考えられる。遺物はこれら整地土の中からも多く出土している。縄文時代晩期後葉の小型壺、平安時代の灰釉陶器瓶類などを含む堆積層は、道路の山側にあった旧茶畑辺りの堆積層を県道周辺の造成土に利用したと考えられる。これら現代の堆積層を除去して緩斜面を確認すると数カ所で遺物の集積する場所と遺構を検出した。おそらく縄文時代後期と考えられるが、斜面地堆積なので自然の凹凸部分を遺構として認識した可能性も含めて再検討が必要である。

縄文後期 縄文時代後期を中心とする遺構は、A区南寄りからB区にかけて展開していた。今回の調査で確認した遺構のうち9割以上が相当する。後期の遺構は160SXとした集石遺構



調査区位置図 (S=1/1000)

160SX を核とした配置が想定される。山側の頂点に位置する160SXは長軸(東西)7m、短軸(南北)4mの範囲に巨礫および大礫が集積していた。そのうち3×2m前後の範囲は、平石を選んで平らに配置した箇所が確認できた。礫を取り除いて、下位の遺構を確認したところ、4ヶ所の径2m前後の浅い円形遺構を検出したが、炉を付属する竪穴建物ではなかった。

縄文時代後期を中心とする遺構群は、炉を付属する竪穴建物が確認できなかった。これはマサノ沢遺跡の特筆すべき点である。焼土あるいは被熱した礫は点在するが、石囲炉や被熱した礫が詰まった集石遺構などはなかった。むしろ焼土や炭化物に伴って細片化した土器を包蔵する固く締まった堆積層が160SX周辺に広がっていた。この堆積層は整地層の可能性もある。

竪穴建物のない大小合わせて400を超える円形および長楕円形からなる遺構群はどのような性格の遺構であったのか。A区南寄りの遺構検出時に4m前後のやや不定形な円形プラン094SXを検出した。当初は長楕円形の土坑からなる一部基盤層が持ち上がったいわゆる風倒木痕を想定した。慎重を期し、十文字にトレンチを入れて土層断面確認したところ、堆積の中位から下位にかけて箱形の断面形と、この断面形の内法に沿う平石を検出した。そこで、大型土坑内を全体に掘り下げ、断面箱形の平面プランを探った。結果、190SKと191SKの2箇所では長方形のプランを検出した。長方形の土坑をさらに掘削すると平石をプランの内法に沿った礫が確認できた。190SKは短辺も長辺も礫を立てて配置した状態で出土し、191SKはほぼ掘り方の輪郭に沿って礫が配置されていた。土坑の上面および底面に礫は配置されていなかった。その規模は長軸方向1.5m、短軸方向0.5mを測る。当初の円形プランの段階から二つの土坑は確認できなかった。構築順を推定すると、(1)大型の円形土坑を掘削、(2)礫を配置し長方形の土坑を2基設営、(3)その後上位を覆う。縄文

時代後期に所属する礫を長方形配置した土坑は愛知県内では初例である。県外周辺の類似例としては、長野県飯田市中村中平遺跡などがある。中村中平遺跡は河岸段丘上に縄文時代後晩期の配石あるいは集石を伴う墓壇が多数確認されている。また人骨と獣骨がこれらの墓壇に伴って大量に出土している。

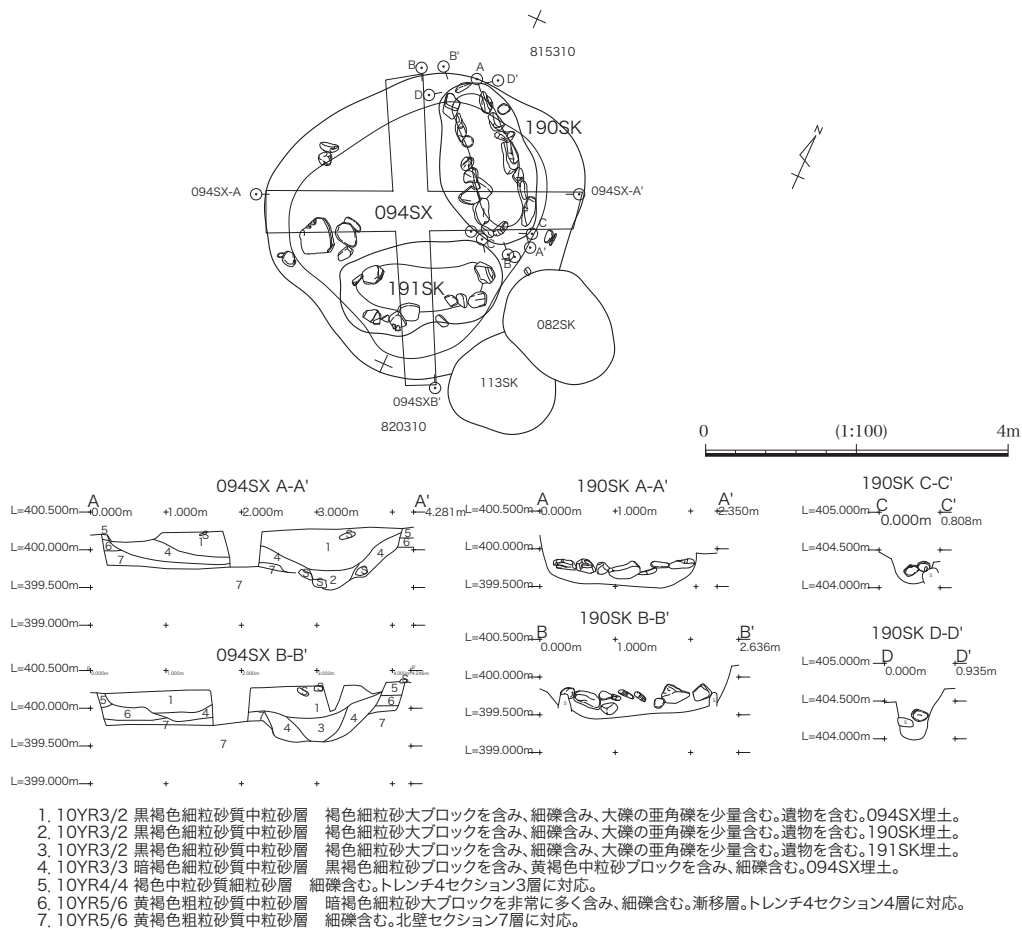
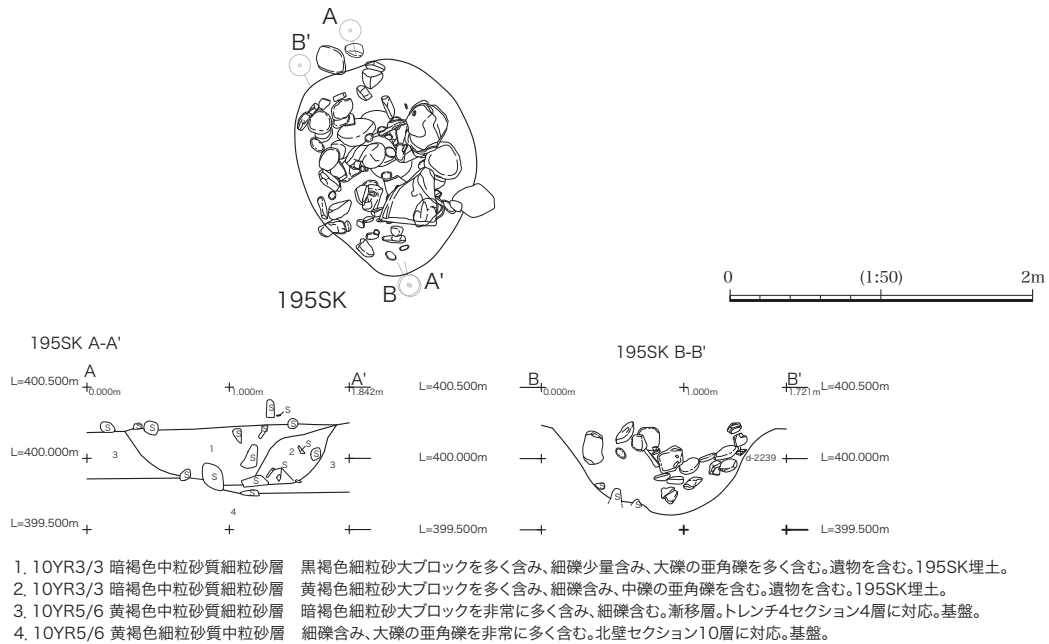
- 195SX** マサノ沢遺跡の礫を伴った遺構はその後20例を超えた。そのうち、195SKは注目できる。土坑の掘り方に平石を貼り付けるように配置し、さらに土坑内に大礫が集石している。遺物は細片化した多量の土器片とともに大中小3点の岩偶・岩版類が出土した。195SKの調査以降新たな見識は、骨片がA区南寄りの遺構群を中心に見つかったことである。さきに表示したマサノ沢遺跡の中核遺構である集石遺構160SXから、礫の輪郭を精査する作業中に骨片がすでに見つかった。160SXは広い範囲であるため、堆積状況などに新しい堆積層の混入も考慮しておく必要があった。ところが、195SK例は1m前後の規模の土坑であるから、検出から掘削にいたるまで混入の可能性が低い。しかも、骨片として認識できる数も多い。その後、礫を伴う遺構以外にも確認され、骨片はA区南側の調査区を中心に1000点を超える資料数となった。骨片は現在同定中であるが、ほぼ全ての骨片が焼骨であり、部位が判明する可能性の骨片もあり、人骨だけでなく獣骨なども予想される。

そのほか、遺構配置で注目されるのは配石遺構と大型土坑の組み合わせがいくつか指摘できる点である。094SX+190SK+191SKもその一つであるが、基本的には360SX+357SKのように、2m前後の土坑に1×0.5m前後の配石遺構がセットになる場合が多い。当然、土坑の大多数はセットにならない単独の大型土坑と長楕円形の遺構である。

- 17B区** B区はA区の南を中心に遺構が展開している。調査前の水田造成時に削平が進み、遺構がないと予想していたところ、地形的にはA区より低くなる旧地形であったため、耕作土および床土を除去すると長楕円形を中心に、円形の大型土坑も確認された。骨片を伴う遺構はA区寄りの遺構に見られたが、それ以外はほとんど確認できなかった。A区は大〜巨礫が配石墓や土坑などの遺構に伴うほか、160SXをはじめ配石・集積の密度が高かった。一方B区は集石など遺構に伴う礫群は遺構全体の半数近くあるが、遺構外の集石は調査区西側の川側一部を除いてほとんどなかった。また、A区南側に比べ遺構の密度も低い。今後の検討課題だが、A区とB区に遺構群の性格が異なる可能性がある。それは、おそらく集石遺構160SXに隣接する遺構群とそうでない遺構群に相違点があるのかもしれない。

- 土器棺墓** 弥生時代前期を中心とする遺構は、おもに土器棺墓である。総数は6基、その内訳は古い時期から、五貫森式が3基、樗王式が1基、水神平式が2基である。186SKの2基並立した例を除く全てが単独の土器棺で、重複や隣接する事例はない。以下、個別に示す。

- 186SK** 186SKはA区の北側と南側の間にあった水田造成に伴う石垣の直下で見つかった。そのため造成土が厚く堆積し、その下位に造成土に関連する不定形な落ち込みである091SXと059SXは重複して5m前後の範囲に確認された。深さ0.5～1m前後の059SXが外側に、深さ0.5m未満の091SXが内側に重なった中央からやや西寄りに186SKを検出した。2つの不定形な落ち込みの底面は凹凸があり、黄褐色礫層の基盤層が上位面近くまで高くなるところもある。186SKは基盤層が高くなる付近にあった。土坑は長軸1m、短軸0.5mを測りそのほぼ中央に土器の口縁部が1周する個体と割れた胴部片が1周する個体が接しながら南北に並存して見つかった。断ち割り掘削により、北側の土器は口縁部を下位に胴部上半までの倒立した状態、南側の土器は口縁部を上位に胴部下半までの正位に設置された状態で確認された。いずれも底部付近は欠損しており、口縁部から胴部までの筒状であっ



縄文時代後期遺構詳細図

た。北側の土器は口縁部が無突帯、頸胴部界は緩やかな有段、幅の狭い頸部に横方向のナデ調整、胴部は左斜め上がりの条痕が見られる。南側の土器は口縁直下に刻目突帯が1周めぐり、頸胴部界は有段となり幅の狭い頸部に横方向の条痕が施され、胴部は左斜め上がりの条痕が見られる。いずれも五貫森式古段階の特徴を示す土器である。北側の土器は胴部上半までしか残存していなかったが、おそらく設置後に上位部分が削平された時に土器内部に同一個体の胴部片が入り込んだと推定できる。南側の土器の内部は小礫のほか、石鏃や剥片石器などが確認できた。186SKの例は初見である。それぞれが単独に出土する例はあるが、今回のように同時期の正位と倒立の土器が2個体並立して設置されている例は今後検討を要する。現状は両者ともに土器棺墓の1例として取り上げておく。

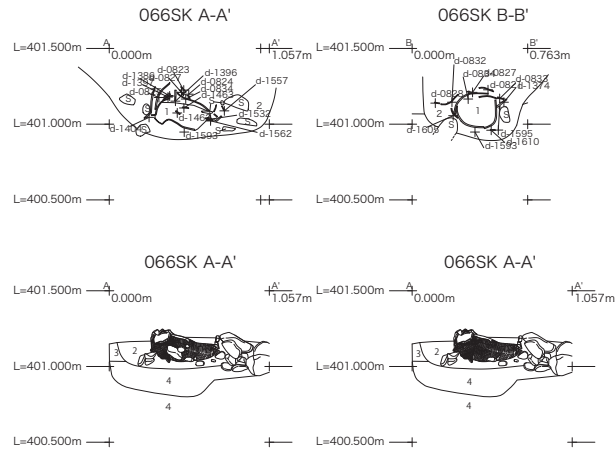
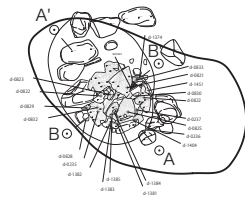
0 9 5 S K 095SKは調査区西壁で検出した北側へ傾く斜位に設置された土器棺墓である。縄文時代後期の大型土坑に重複する土坑で断面観察の結果、50cm前後の円形土坑に土器棺が設置されていたと判断した。蓋になる土器や礫はなかった。一方、底部付近に2～3重に土器片を用いて覆っていた。さらに底部は打ち欠きで欠損していたが、破片で底部を覆っていた。つまり、棺身の底部付近に土器片を用いて塞いでいることがわかった。なお、棺身内部の埋土から大破片の土器が数点出土し、これらが棺身の蓋であったかは検討を要する。棺身は口縁端部が丸く凸状になり体部に粗めの斜位条痕を施す五貫森式の深鉢である。

4 2 7 S K 427SKは浅く整った横方向の条痕深鉢を棺身とする立位の土器棺墓である。土坑の掘り方は棺身より少し大きい50cm前後の楕円形である。検出時、土器棺の口縁直上に半周にわたり礫を配置していた。これら礫の直下あるいは周辺に粗い横方向の二又工具による条痕深鉢片が点在していた。土器棺を断ち割って掘削を進めると、正位の口縁から底部付近までの土器が北側1/3程度崩れているものの、良好な状態を保ちながら設置されていた。口縁部は外反せず、端部が凹線状にくぼむ強いなでが施されている。崩れた部分には検出時に一部確認していた土器片と同一個体の条痕深鉢片が大破片で含まれていた。これらは棺身の上に設置された土器片蓋と思われる。棺身は底部が打ち欠かれ欠損している。棺身は筒状に設置され、その下位には、蓋と同一個体とみられる大破片を敷いていた。これら土器の特徴から檜王式の土器である。

0 6 6 S K 066SKはA区北側の043SXに南側で重複する長軸1.5m短軸0.8mを測る土坑の中央に設置された重厚に蓋を配した横位の土器棺墓である。検出当初は043SXの竪穴状遺構に関連する土器集積と考えた。大型土器片が折り重なって確認され、遺構の輪郭も不明瞭であった。そこで、043SX内を下位に掘り進め再検出したところ、土坑の輪郭がつかめ、043SXと別遺構と判断した。折り重なる上位の土器片を外して行くと、北西側に口縁部、南東側に底部を軸にして設置した深鉢が棺身であるとわかった。口縁部側は別個体の底部欠損の深鉢が倒立した状態で、少なくとも3個体分を重ねて設置していた。一方、底部側は底部を打ち欠き欠損させ、その部分を別個体の胴部片で覆っている。棺身の口縁部直下に、別個体の口縁から底部まで残存する1/4周の大破片を敷いて棺身の口縁部を少し持ち上げている。棺身に隣接して中～大礫を用いて固定し設置している。棺身を含めて3個体以上の個体を用いて構成された土器棺墓はすべて口縁部が外反する二又工具で口縁直下から底部付近まで縦位羽状条痕の深鉢である。口縁端部に押引や条線を加える違いはあるが、水神平式深鉢である。

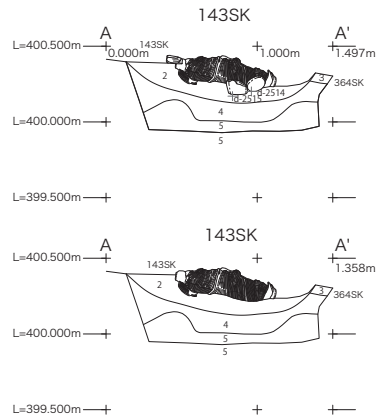
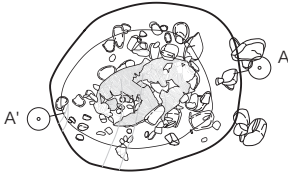
1 4 3 S K 143SKは縄文時代後期の土坑群と重複する長軸1.5×短軸1mを測る楕円形の土坑に、横位に設置された合口の土器棺墓である。調査区を横断するトレンチ9掘削時に確認され、

066SK



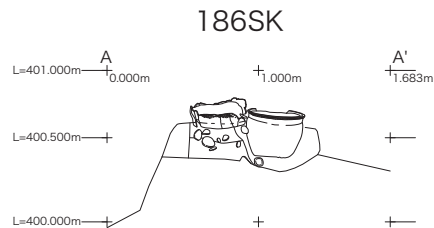
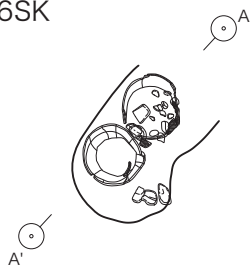
- 10YR3/2 黒褐色中粒砂質細粒砂層 褐色細粒砂ブロックを少量含み、細礫を含む。遺物を含む。
- 10YR3/3 暗褐色極細粒砂質細粒砂層 黄褐色中粒砂小ブロックを含み、細礫少量含み、大礫の亜角礫を多く含む。遺物を含む。
- 10YR5/6 黄褐色中粒砂質細粒砂層 褐色中粒砂大ブロックを多く含み、細礫多く含む。漸移層。トレンチ4セクション4層に対応。基盤。
- 10YR5/6 黄褐色粗粒砂質極粗粒砂層 細礫を非常に多く含み、大礫の亜角礫を非常に多く含む。北壁セクション10層に対応。基盤。

143SK

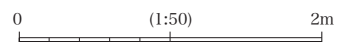


- 10YR2/2 黒褐色細粒砂質極細粒砂層 細礫少量含み。遺物を含む。143SK埋土。
- 10YR2/2 黒褐色細粒砂質極細粒砂層 細礫少量含み、中礫の亜角礫を多く含む。遺物を含む。143SK埋土。
- 10YR3/3 暗褐色極細粒砂質細粒砂層 黒褐色細粒砂ブロックを含み、細礫含み、中礫の亜角礫を少量含む。遺物を含む。364SK埋土。
- 10YR3/3 暗褐色極細粒砂質細粒砂層 褐色細粒砂ブロックを含み、細礫少量含み、中礫の亜角礫を少量含む。遺物を含む。別遺構埋土か。
- 10YR5/6 黄褐色中粒砂質細粒砂層 暗褐色細粒砂ブロックを含み、細礫含み、中礫の亜角礫を少量含む。漸移層。トレンチ4セクション4層に対応。

186SK



- 10YR2/2 黒褐色粗粒砂質中粒砂層 細礫多く含み、中礫の亜角礫を多く含む。遺物を含む。186SK土器(北)内面埋土。
- 10YR2/2 黒褐色粗粒砂質中粒砂層 細礫多く含み、中礫の亜角礫を多く含む。遺物を含む。186SK土器(南)内面埋土。
- 10YR2/2 黒褐色細粒砂質中粒砂層 細礫多く含み、中礫の亜角礫を含む。遺物を含む。186SK埋土。
- 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト層 褐色シルト大ブロックを含み、細礫少量含み、大礫の亜角礫を多く含む。炭化物を極少量含む。遺物を含む。091SX埋土。
- 10YR5/6 黄褐色粗粒砂質極粗粒砂層 細礫非常に多く含み、大礫の亜角礫を非常に多く含む。北壁セクション10層に対応。基盤。



縄文時代末～弥生時代前期遺構詳細図 (1:50)

この時点で上位に礫の設置や盛土の痕跡はなかった。遺構検出時は埋土が比較的わかりやすく楕円形の土坑を検出した。土器棺はこの土坑の中心にあった。土器棺の周りには中～大礫が棺に接し点存在していた。断ち割りの断面観察時も礫が土器棺の下位に接して点存在していたことから、棺身を固定するために設置された礫と考えた。側面観から北側の土器が南側の土器の中に入り込んでいることがわかった。土器を取り上げながら内部の状況から、北側の土器は外反する部分の口縁部を打ち欠いていることがわかった。さらに北側の土器を持ち上げるために打ち欠いた口縁部片を底部付近と合口部周辺の直下に設置していた。つまり、横位ではあるが片側をやや持ち上げた斜位の状態であった。これら2個体の土器は水神平式で、口縁部が外反する外面に二又工具による縦羽状条痕深鉢であった。

土器棺墓のほかに、土坑、竪穴状遺構などが数カ所確認されたが、縄文時代晩期末から弥生時代前期の遺構は、縄文時代後期の遺構とくらべ1割に満たない。

以上、縄文時代後期の墓地に関連する石棺墓・配石墓および大型土坑を中心に調査の経過を交えて示した。続いて、縄文時代晩期末から弥生時代前期の土器棺墓を中心に個々の土器棺墓の設置方法を加えて示した。マサノ沢遺跡のおもな遺構群はこれら2つの時期を中心とする墓地関連遺構である。

縄文時代後期について、調査段階では竪穴建物など居住地に関連する遺構が確認できなかった。竪穴状遺構に付属するピットはいくつか存在したが、炉跡を付帯する竪穴建物はなかった。柱痕をもつピットはいくつか確認したが、調査時に建物の柱として配置を認定するにはいたらなかった。

大型土坑の重複に特徴があった。大きく重複するのではなく、遺構の縁辺が重なる程度の重複が多く、それが各遺構数カ所ある。これらの特徴的な重複は大型土坑を掘削するとき、直前の大型土坑の存在を意識していたと考えたい。つまり、墓壇を構築していくときに規範があったと想定する。今後は遺構の重複関係を精査して規範の是非を検証していきたい。

弥生時代前期は6基の土器棺とそのほか土坑を数カ所確認した。縄文時代後期と同様に炉跡を付帯する竪穴建物はなかった。土器棺を6基確認したが、一ヶ所に集中しているのではなく、散在して分布している。地形的な側面からみると、段丘の縁辺に設置されていることは指摘できるが、規則的に並んでいるとはいえない。50基程度まとまっていれば大規模な墓地あるいは集落も想定できる。マサノ沢遺跡の土器棺墓は小規模な墓地である。

出土遺物の時期は長期間にわたる。土器を中心に示すと、縄文時代中期後半から弥生時代後期まで、さらに近代の陶磁器もある。これらのうち、遺構の中心となる時期の前後が数量的には多い。

特筆すべき遺物としては、ハート形土偶など縄文時代後期を中心とする祭祀具であろう。

ハート形土偶は、東北南部から北関東を中心に分布する土偶である。県内はもちろん、東海地域の確認例はない。持ち込まれた土偶だとすれば遠隔地交流の一端を示す好資料である。また、同一土坑内から線刻をもつ岩偶・岩版類も出土している。時期比定や使われ方の検討に布石となった。

岩偶・岩版類は有溝石錘、切目石錘を含めると20点以上出土している。なかでも、さきに示した配石墓195SXから3点まとまって出土した岩偶・岩版類は同じ形態の大中小であり注目しておきたい。

(永井宏幸)



マサノ沢遺跡 2017 年度遺構全体図 (1:300)



160SX 周辺



186SK 断ち割り状況



094SX



427SK 断ち割り状況



190SK



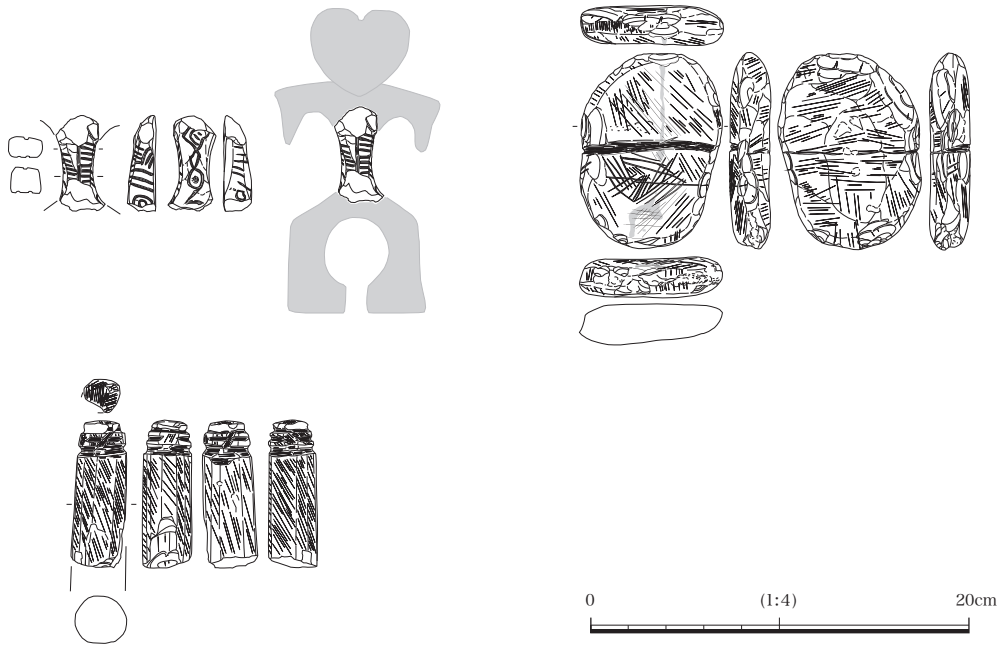
066SK 断ち割り状況



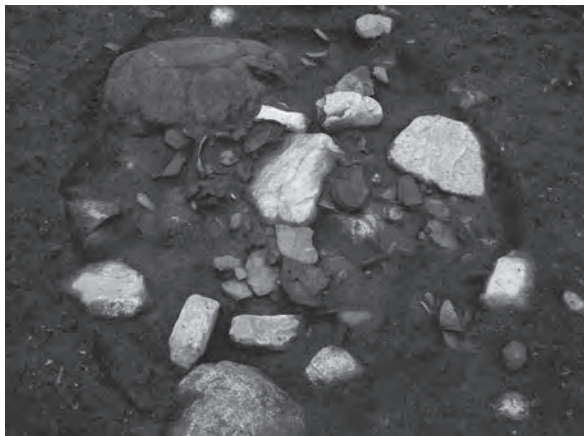
195SK



143SK 断ち割り状況



マサノ沢遺跡遺物実測図



179SK 遺物出土状況



石棒・石刀類出土状況



岩偶・岩版類 (195SK)



有溝石錘 (426SK)

ふもんじきゅうけいだい

普門寺旧境内(本発掘調査B)

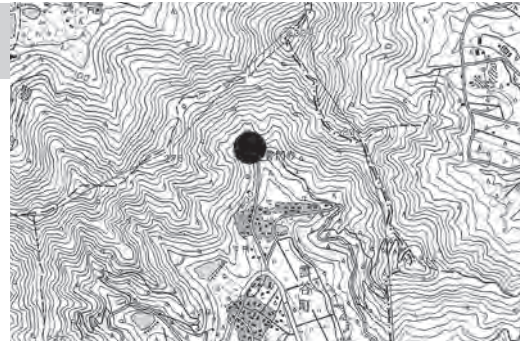
所在地 豊橋市雲谷町字ナベ山下7ほか
(北緯34度44分40秒 東経137度28分10秒)

調査理由 予防治山事業・小規模治山事業

調査期間 平成29年5月～平成30年1月

調査面積 300㎡

担当者 酒井俊彦・早野浩二



調査地点(1/2.5万「二川」)

調査の経過 発掘調査は予防治山事業・小規模治山事業に伴う事前調査として、愛知県農林水産部森林保全課東三河農林水産事務所から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて実施した。普門寺旧境内は中世前期を主体とする山寺遺構で、愛知大学による分布調査、豊橋市教育委員会による測量調査・分布調査、発掘調査の結果、二つの旧本堂とそれに付随する多数の平場群、中世墓群、経塚、池等から構成されることが判明している。調査区は丘陵下位(現本堂の下位)の平場に設定した17A区(調査面積170㎡)、東向き尾根(現本堂の上位)に展開する平場群(豊橋市教育委員会によるF地区)中の下位の平場(F-1・F-2)に設定した17B区(調査面積130㎡)である。調査期間は17A区が平成29年5月から6月、17B区が平成29年11月から平成30年1月である。

立地と環境 普門寺旧境内は愛知県と静岡県との県境でもある弓張山地に形成された谷の奥部に立地する。普門寺旧境内の遺構が展開するのは現普門寺客殿裏の標高100mから260mの尾根上である。なお、17A区周囲の標高は約110m、17B区周囲の標高は約130mである。普門寺は船形山普門寺と称する高野山真言宗の寺院で、市内随一の豊かな歴史や文化財を誇り、近年は紅葉の名所としても親しまれている。

調査の概要 発掘調査の結果、調査前に確認されていた平場001SXに加え、さらに上位の丘陵斜面にも平場002SXを確認した。これらの平場とその周辺において、上位の平場と下位の平場を通行するために開削した通路と思われるような造作以外、明確な遺構は確認されなかった。平場や斜面の堆積層中には近世以降の遺物を包含するが、戦国時代の遺物も散見された。また、沢に面した斜面の堆積層中からは、渥美産山茶碗・甕・子持器台または仏供等、瓦に加えて、土師器皿がまとまって出土した。

17B区 上位の平場006SX(豊橋市教育委員会によるF地区のF-2)は長さ16.0m、最大幅6.5mで、チャートの岩塊を南端とする。平場006SXはその南端付近を発掘調査したのみで、明確な遺構は確認されなかったが、平場周辺や斜面の堆積層中からは、渥美産山茶碗・甕等、中世前期の遺物に加えて、古瀬戸後期の播鉢、土師器内耳鍋、青磁碗等、中世後期から戦国時代の遺物がまとまって出土した。

下位の平場007SX(豊橋市教育委員会によるF地区のF-1)は長さ15.0m、最大幅5.0mで、調査前から「墓」ともされる石積みが露呈していた。墓の可能性のある石積み008SZは東向きの緩斜面に設置され、上段は長軸1.50m・短軸1.30m、下段は一辺約2.30mの規模である。石積みは周囲に算出するチャートと砂岩を利用して方形の石列を構築し、石列内と背面の緩斜面には拳大程度の礫が集積されていた。集積された礫群中からは、銭貨(寛永通宝)、鉄釘等が出土した。

沢に続く斜面009NRは堆積層中に中世前期を主体とする遺物を包含し、渥美産山茶碗・

甕・蓮弁文壺・刻文壺等が多く出土した。その他、沢付近から出土した特徴的な遺物として、唐草文をあしらった青銅製飾金具、石硯等がある。

ま と め 今回の発掘調査の結果、普門寺旧境内の遺構は現本堂上位の丘陵を主体として濃密に展開することが改めて明らかとなった。今後、出土遺物の詳細な分析を通じて、平場の時期、機能等、その利用実態が明らかになることが期待される。また、17B区の石積み008SZは、17世紀後半以降の普門寺の復興と山麓への境内移転に関連する可能性も考慮される。

(早野浩二)

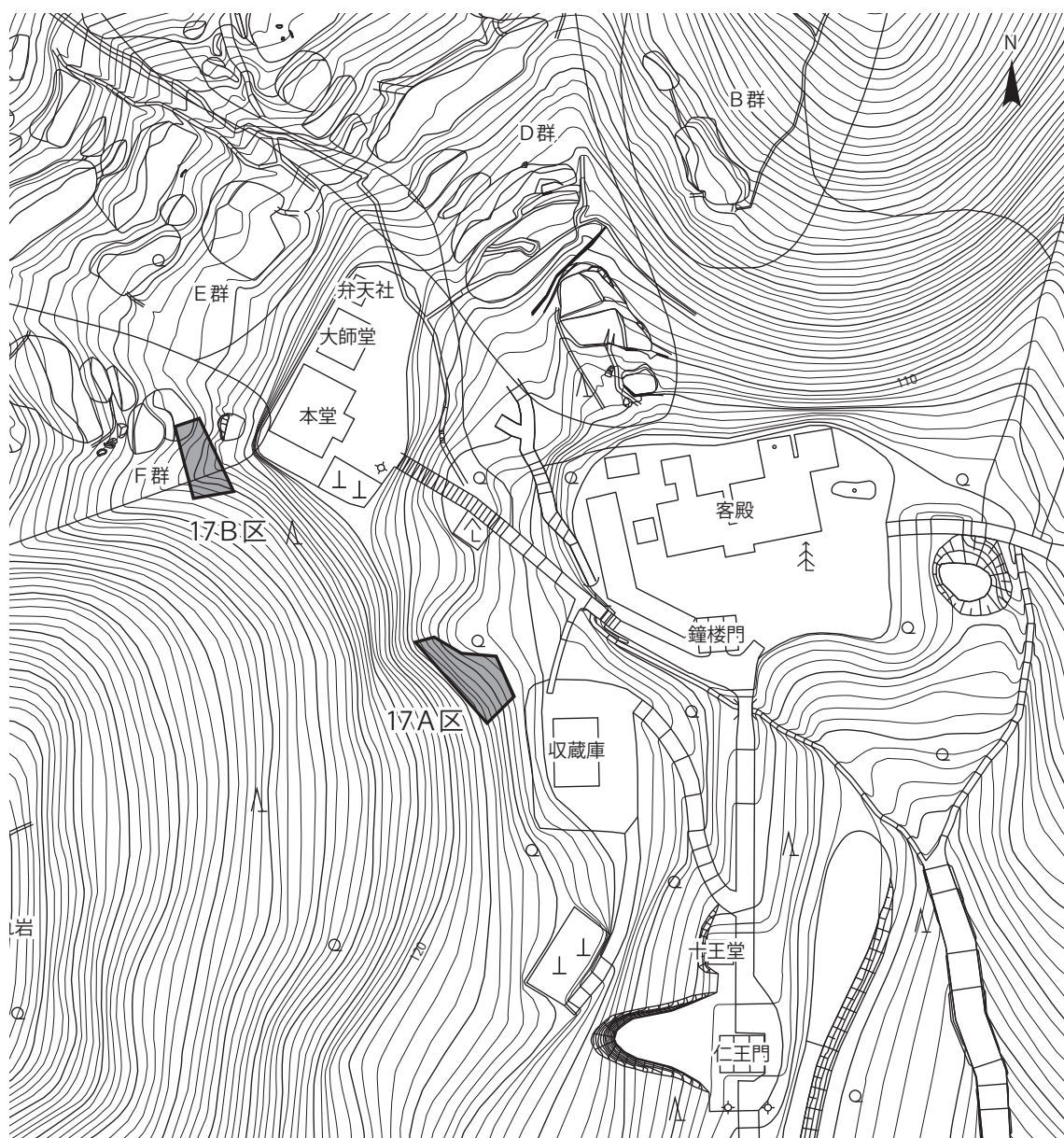


図1 調査区配置図 (S=1:5000)



普門寺旧境内遠景



17B 区全景



17A 区全景



17 A 区の通路状遺構



17A 区 遺物出土状況 (山茶碗・土師器皿)



7 A 区遺物出土状況 (子持器台または仏供)



17B 区 平場 006SX 周辺遺物出土状況 (山茶碗等)



17B 区 沢 009NR 遺物出土状況 (石硯)



17B 区 石積み 008SZ 検出状況 (南東から)



17B 区 石積み 008SZ 全景 (東から)

